

令和5年度

全国学力・学習状況調査の結果について（概要）

千葉市教育委員会

本市児童生徒の調査結果について公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは学力の一部であり、各学校の教育活動を多角的に評価・分析した結果と合わせて、学校教育活動の改善に努めてまいります。

1 調査の概要

- (1) 調査実施日 令和5年4月18日（火）
- (2) 調査対象 小学校第6学年 中学校第3学年
- (3) 調査内容
 - 国語 「知識」「活用」を一体的に問う問題
 - 算数・数学 「知識」「活用」を一体的に問う問題
 - 英語 「知識」「活用」を一体的に問う問題
 - 質問紙調査（学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等）

2 教科別結果概要

（令和5年度と悉皆調査実施年度との比較）

（1）全国・千葉県・指定都市の平均正答率（%）と千葉市全体の結果（ここでの全国は、公立のみを示す）

【資料1】問題別平均正答率一覧(%)[全国・千葉県・指定都市・千葉市]<令和元年度～令和5年度>

		全国 平均正答率	千葉県 平均正答率	※指定都市 平均正答率	千葉市 平均正答率	全国との 比較	
小学校	国語	令和5年度	67	67	68	68	1
		令和4年度	66	62	66	67	1
		令和3年度	65	65	65	65	±0
		令和元年度	64	63	64	64	±0
	算数	令和5年度	63	62	63	63	±0
		令和4年度	63	63	64	64	1
		令和3年度	70	70	71	71	1
		令和元年度	67	65	67	67	±0

		全国 平均正答率	千葉県 平均正答率	※指定都市 平均正答率	千葉市 平均正答率	全国との 比較	
中学校	国語	令和5年度	70	69	70	71	1
		令和4年度	69	68	66	69	±0
		令和3年度	65	65	65	66	1
		令和元年度	73	72	73	73	±0
	数学	令和5年度	51	51	52	53	2
		令和4年度	51	50	52	52	1
		令和3年度	57	56	58	58	1
		令和元年度	60	57	60	59	-1
	英語	令和5年度	46	46	47	48	2
		令和元年度	56	56	57	57	1

※国語と算数・数学の問題は、基礎的な知識を尋ねる「A問題」と、その知識の活用力をみる「B問題」に分かれていたが、平成31年度（令和元年度）より新学習指導要領の方向性に沿う形でA、Bを一体的に問う問題へ改善

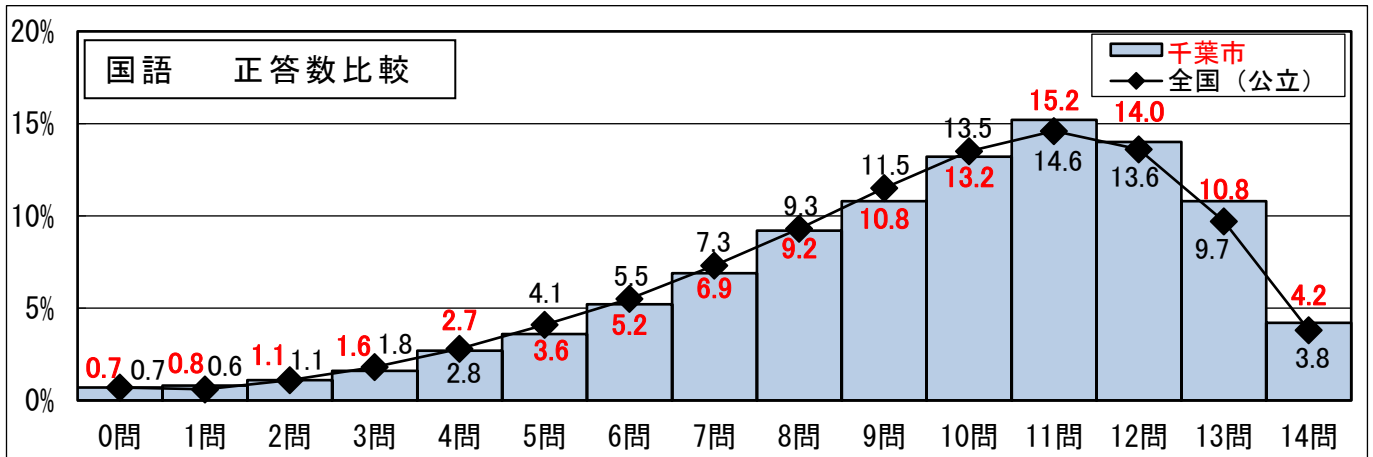
※平成28年度より平均正答率は整数値で公表

※千葉県平均正答率は、千葉市を含んだ千葉県の正答率の数値

※全国及び指定都市の平均正答率は、公立のみの数字である。

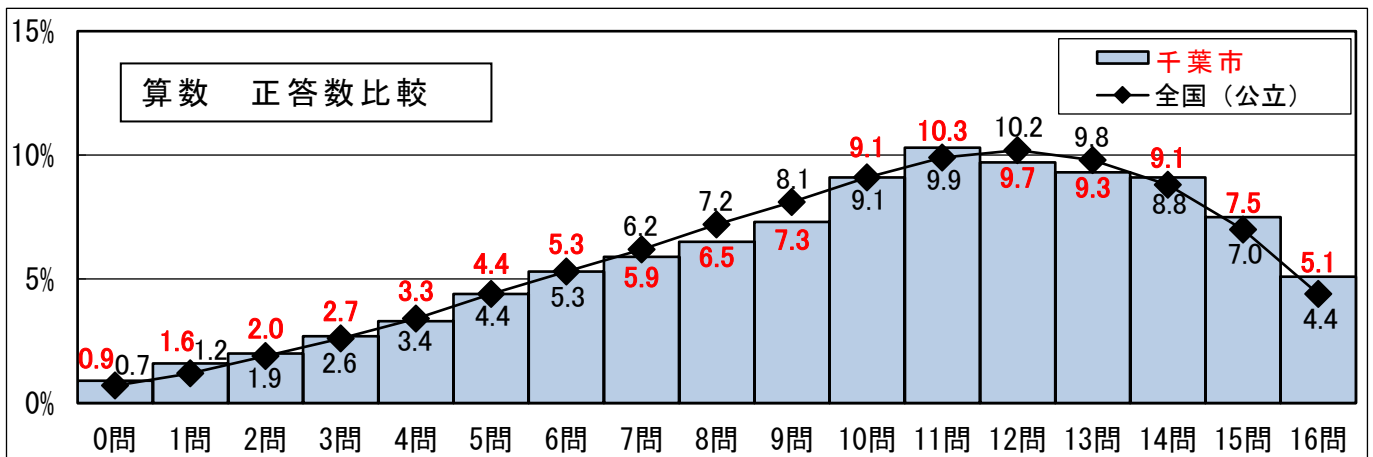
(2) 正答数の分布 (全国との比較)

【資料2】正答数分布 (横軸: 正答数、縦軸: 人数の割合) [全国・千葉市] <令和5年度>
<小学校6年生国語>



	平均正答数	平均正答率	中央値	標準偏差
千葉市	9.5 問 / 14 問	68%	10.0	3.0
全国 (公立)	9.4 問 / 14 問	67%	10.0	2.9

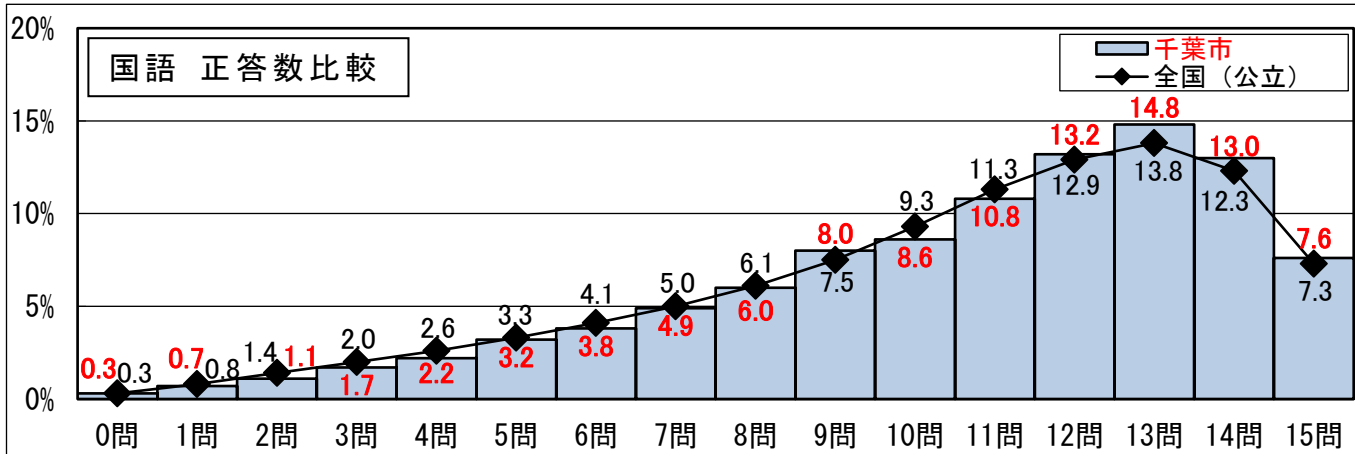
<小学校6年生算数>



	平均正答数	平均正答率	中央値	標準偏差
千葉市	10.0 問 / 16 問	63%	11.0	3.9
全国 (公立)	10.0 問 / 16 問	62.5%	11.0	3.8

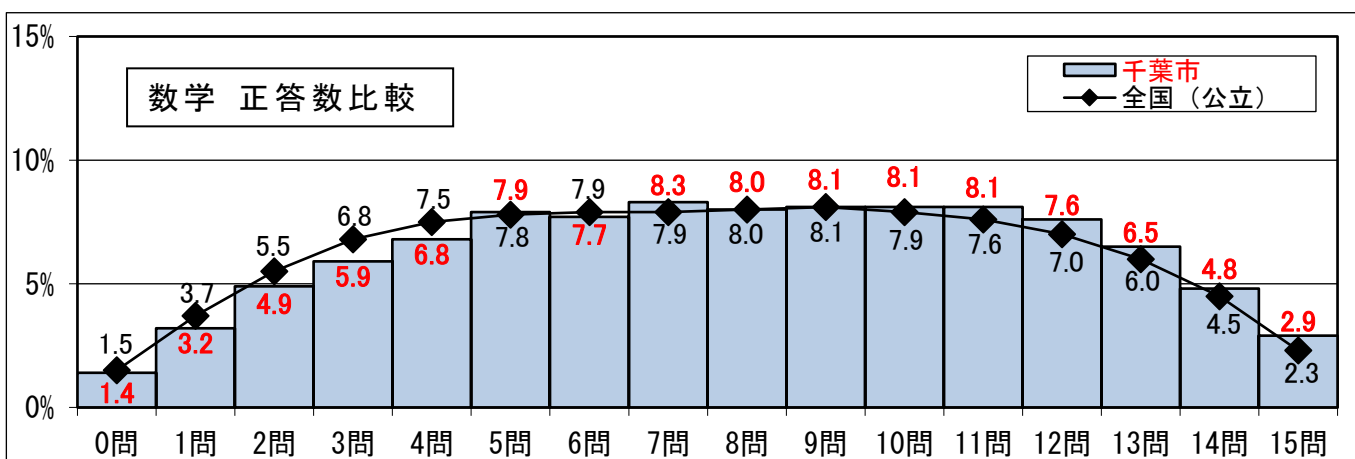
- ・国語では、平均正答数が全国より0.1問高く、平均正答率は1ポイント高い。正答数の分布は、全国と同様に右寄りの山型のグラフになっている。正答数が0～2問の層は全国と比較して同程度、11問以上の層の割合は全国と比較して高くなっている。
- ・算数では、平均正答数は全国と同じで、平均正答率は0.5ポイント高い。正答数の分布は、全国と同様に右寄りの山型のグラフになっており、正答数が0～3問の層と14問以上の層の割合が、全国と比較して高くなっている。
- ・2教科共通して、上位層の学習のさらなる充実を図るとともに、正答率が低い層への学習指導を見直し、中位層に引き上げることが課題である。

< 中学校 3 年生国語 >



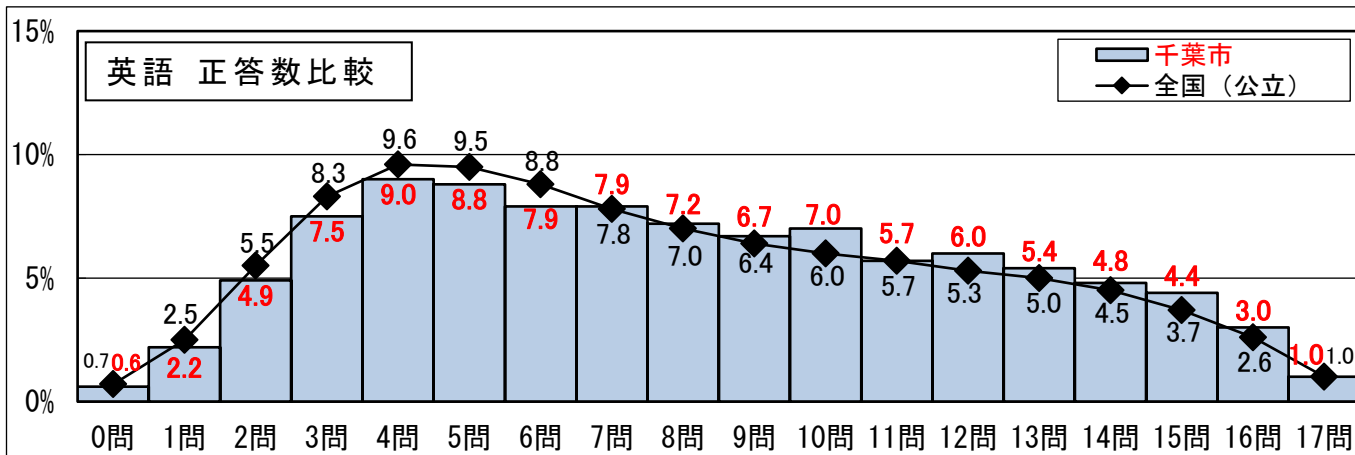
	平均正答数	平均正答率	中央値	標準偏差
千葉市	10.6 問 / 14 問	71%	11.0	3.3
全国 (公立)	10.5 問 / 14 問	69.8%	11.0	3.4

< 中学校 3 年生数学 >



	平均正答数	平均正答率	中央値	標準偏差
千葉市	7.9 問 / 14 問	53%	8.0	3.9
全国 (公立)	7.6 問 / 14 問	51.0%	8.0	3.9

< 中学校 3 年生英語 >



	平均正答数	平均正答率	中央値	標準偏差
千葉市	8.1 問 / 17 問	48%	8.0	4.2
全国 (公立)	7.7 問 / 17 問	45.6%	7.0	4.20

- ・国語では、平均正答数が全国より 0.1 問高く、平均正答率は 1.2 ポイント高い。正答数の分布は、全国と同様に正答数の多い生徒の割合が高い、右寄りの山型のグラフになっている。正答数が 12 問以上の上位層の割合が全国よりも高くなっている。下位層と中間層の引き上げを図ることが今後の課題である。
- ・数学では、全国より平均正答数は 0.3 問、平均正答率は 2 ポイント高い。正答数の分布は、全国と同様の中央がやや高いなだらかな山型となっている。下位層の引き上げを図ることが今後の課題である。
- ・英語では、全国より平均正答数は 0.4 問高く、平均正答率は 2.4 ポイント高い。正答数の分布は、全国と同様に正答数の少ない生徒の割合が高い、左寄りの山型のグラフになっている。下位層の引き上げを図ることが今後の課題である。

(3) 全国平均正答率との差から見る各学校の経年推移<令和4年度と5年度との比較>

【資料3】全国平均正答率との差から見る各学校の経年推移表

令和4年度の全国平均正答率と各学校の平均正答率との差と令和5年度の全国平均正答率と各学校の平均正答率との差を比較

*出題される問題が毎年異なり、母集団の児童生徒も異なっているが、変化のある学校の傾向を把握するため、経年比較を実施。

*\表記について：例えば、令和4年度全国平均正答率70、A学校平均正答率90で差が+20、令和5年度が全国平均正答率70、A学校平均正答率80で、差が+10であったとする。この時、A学校平均正答率は「+20」から「+10」へと10ポイント下がっているため、全国平均正答率よりも高いが、「\」と表記。反対にこの差が上がっている場合「/」と表記。

ア 小学校

(注釈：令和4年度または令和5年度の該当学年の調査実施児童数が40人以下の学校については、母集団が小さく、平均値が外れ値の影響を受けやすいため、正しい経年比較ができないので公表はしない。)

学校名	国語	算数
新宿	\	\
本町	\	\
寒川	\	\
登戸		/
院内	/	\
蘇我	/	
都	/	/
都賀	/	
検見川		\
稲毛	/	\
園生	/	/
若松		\
大森		
稲丘	/	/
花園		\
憤橋	/	
幕張		\
長作	/	/
生浜		
誉田	/	
轟町		\
鶴沢	/	
平山		
松ヶ丘	\	\
宮崎		\
緑町	\	
川戸	/	/
山王	/	
小中台	\	\
小倉		\
千草台		/
稲毛二	\	\
星久喜	/	/
幕張東		
土気		\
桜木	/	
宮野木		
生浜西	\	\
こてはし台	\	\
西小中台	/	/

学校名	国語	算数
北貝塚		
幕張西		
草野		
柏台		/
千城台東	/	
小中台南		
幸町三		
高洲三		
千草台東	\	\
作新	/	/
みつわ台北		
誉田東		\
みつわ台南		\
幕張南	/	/
都賀の台	\	\
上の台	\	\
磯辺三	\	\
生浜東		\
泉谷		\
土気南		
西の谷		
小谷	\	\
有吉		\
打瀬	\	
金沢	/	/
あすみが丘	\	\
扇田	\	\
瑞穂	\	
海浜打瀬		
おゆみ野南		
美浜打瀬	\	
高洲	\	\
真砂東		/
真砂西		
高浜海浜	\	
磯辺		\
幸町	/	/
千城台わかば	/	/
千城台みらい		\

注) 推移表記 /:差が大きく向上 \:差が低下 空欄:大きな変化なし

イ 中学校

(条件：令和4年度または令和5年度の該当学年の調査実施生徒数が80人以下の学校については、母集団による影響が顕著となり、経年比較できないため公表しない。)

学校名	国語	数学
加曾利	↗	↗
葛城		↗
椿森	↘	
緑町		↘
小中台		↗
花園		
新宿	↗	↗
蘇我		
幕張		
生浜	↘	
誉田		
轟町		↘
松ヶ丘		
稲毛		
千城台西		
こてはし台	↗	↗
草野		
幕張西		
都賀		

学校名	国語	数学
みつわ台		
緑が丘		↗
天戸		↘
若松	↗	
幸町二	↗	↗
山王	↗	
稲浜	↗	
貝塚	↗	
泉谷	↗	↗
幕張本郷		
土気南	↗	↗
打瀬		
有吉		
大椎	↗	↗
真砂		↘
おゆみ野南		
磯辺	↗	
花見川		↗
高洲		↗

注) 推移表記 ↗:差が大きく向上 ↖:差が向上 空欄:大きな変化なし ↘:差が低下

【資料4】平均正答率の顕著な向上が見られた学校の取組事例<経年推移の比較から>

顕著な向上が見られた学校からは、以下のような取組が報告されている。

ア 小学校

学校名	取組内容
都	<p>定期的な小テストの実施による、学習の必要感向上と家庭学習の習慣化を図った。</p> <p>機械的に計算方法を覚えるのではなく、理解を深めるために図を活用し、計算の意味をより考えるように授業を行った。</p> <p>各々が今もっている力で「できた！わかった！」が感じられる授業の日常化を目指し、1時間1時間が個別最適な時間になるように、学習をあきらめていた児童へのアプローチを意識して授業を行った。</p>
園生	<p>(1) 「わかる」授業を目指した取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ○単元のゴールの明確化 掲示などで学習の道筋を見えるようにすることで、意欲を落とさずに学習に臨めるようにした。 ○「聴き合い活動」の定着、充実 本校がこれまで積み重ねてきた学習形態の一つであり、どの学級も行えることを目指した。 まずは、相手の話をよく聴こうとする姿勢を育むことで、自分の話も聞いてもらいたい、話したいという気持ちの高まりへとつながるようにした。 ○「道徳」の授業の充実 校内研の研究教科でもある「道徳科」の授業の工夫、改善に取り組んだ。 道徳科の学習は、どの教科の授業にもつながる要素を多く含んでいる。 <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの反応に応じた問い返し ・ユニバーサルデザインを意識した板書の工夫 ・思考ツール等を生かした授業の展開を意識した。 <p>(2) 学力格差、二極化への対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ○既習事項が確認できる場をつくり、プリント等で振り返りながら、足りない力を補えるようにした。 ○子どもたち同士の「学び合いの場」を設定した。 ○意見交流の場の充実を図った。

稲丘	<p>国語において結果が見られたのが、相手の意図を理解しながら読んだり、聞いたりして、自分の考えを表現できるという問題である。日頃から最後まで聞いたり、隙間時間に読書したりするよう指導した結果と考えられる。</p> <p>算数においては、答えを導くだけでなく、言葉で説明したり場面と関係付けたりするような発展的な問題である。こちらも日頃から「なぜ」を大切にし、意味理解に重点を置いて指導した結果と考えられる。</p>
長作	<p>昨年度の学力テストの考察を活用し、正答率の低かった領域に関して重点として取り組んだ。</p> <p>学力向上アクションプランを活用した。</p>
川戸	<p>学校全体の取組として、思考力・判断力・表現力等を伸ばすことに重点を置いて3つの取組を行った。</p> <p>①校内研修である。単元内自由進度学習や、ICTの効果的な活用について研修を積んでいる。</p> <p>②朝自習の計画である。子供たちが、それぞれ何を学習するのか活動を計画し、週末に振り返るようにしている。</p> <p>③家庭学習の充実である。毎週金曜日に、自分に必要な学習は何か考え、「めあて」「学習内容」「振り返り」を家庭学習ノートに記入するようにしている。</p> <p>また、6年の取組として、以下のことを実施している。</p> <p>宿題について、家庭での学習時間が1日60分になるよう調整して出している。文章構成力、表現力、課題設定の力を育成することを意識して出している。よい書き方を紹介し、広めるようにしたり、文章で表現することへの抵抗感をなくすようにしたりしている。</p> <p>授業では、「過程が大切」ということを常に意識させている。算数では、答えに対する様々な解き方についてやりやすい方法を思考する、国語では、作文でも読解でも「～と思うわけは～だから」というように、根拠を大切にするなど、子供の実態に合った指導法を工夫している。工夫例として、簡単な場面や、数字に置き換えたり、具体物を利用したり、良い例や悪い例を提示したりして、考えさせている。「わかる」「できる」という思いを大切にすることで、子供の自己肯定感を高めている。「できない」「わからない」ことを叱ることをしない。協働的な学習として、誰とでもどんな時でも、「自分の学びを深める」ために友達と学びを共有するという意識をもたせるようにしている。</p>
星久喜	<p>令和4年度において、5学年算数科の学習は専科教員が行った。専門性を生かした指導や基礎的な問題に加えて発展的な問題に多く取り組んだことで、思考力の向上や学習内容の定着につながったと考える。加えて、すべての教科で「書く」取組を重視して学習活動を進めたことで、集中力や思考力が高まり、国語科の学力の向上につながったと考える。また、学力向上アクションプランの重点的な取組を全体で月に1回程度確認し、本校で身に付けさせたい力の共通理解を図ったことで、本校の課題を意識した授業作りを行うことができた。さらに、朝10分間の学習タイムの時間を週に3回程度設け、漢字や計算の基礎的な問題や、前日に学習した内容を踏まえた練習問題に取り組んだことで基礎学力の向上が見られた。朝学習の時間内に答え合わせを行う時間も確保したことで、子供たちが自分の課題を把握し、自分に必要な学習を考えることができ、学習意欲の向上につながったと考える。</p>
西小中台	<p>学校全体としては、教職員が学校教育目標や児童に付けたい資質能力を常に意識できるようにした。また、体験活動を多く取り入れたり、ICTを効果的に活用した授業を行ったりすることで、児童の学習意欲を高めるようにした。</p> <p>学年としては、学習のめあてを明確にすることで、子供たちもめあてを意識して学習に取り組むことができた。また、ドリルや課題等の間違いをそのままにせず、できるようになるまで指導を粘り強く行った。学級の人数が少ないので、個に応じた指導にも力を入れることができた。</p>

作新	<p>国語の「読むこと」の領域において向上が見られた。本校は昨年度までの3年間、市や県、学力調査の結果を踏まえ、校内研究において国語科の「読むこと」に焦点を当て、「主体的、対話的な学び」「深い学び」「自分の考えをもち、進んで発表する児童」のテーマを掲げながら研究を行ってきた。その中で、それぞれのテーマにおいて教材の研究や関わりの仕方を工夫し、児童が主体的に学ぶ工夫を行ってきた。具体的には、「導入の工夫」「単元構成の工夫」「ワークシートの工夫」「心情や段落構成を読み取るための手立ての工夫」といったようなものである。また、話し合いや共有などの友達との関わりの場面において自分の考えを確かめたり、考えの幅を広げたりしていた。そのような工夫を学年、学校で共有し、継続的に取り組んできたことが今回の結果の一助となったのではないかと考える。</p>
幕張南	<p>国語の「話すこと・聞くこと」において、顕著な向上が見られた。校内研究において、国語の「話すこと・聞くこと」に視点を置いた研究を2年間行っている。話の仕方や相手にわかりやすく伝える方法を学習を通して身に付けてきたことが結果につながったのだと考えられる。また「読むこと」に関しても、向上が見られており、全学年で音読の宿題やスピーチ活動に取り組んだことで、文章読んで考える力もついてきたと考える。</p>
金沢	<p>従来の宿題（漢字練習〇ページ、算数ドリル〇ページ）を廃止し、自主学习ノートを活用した宿題へと変更した。児童自身が興味のあるものや理解が不十分だと思うところを選んで学習することが個々の学力の向上に役立ったと考える。</p>
幸町	<p>国語に関しては、読書指導に力を入れている。毎日15分間朝読書の時間を確保し、定期的に本の紹介や読書ビンゴ、読書宣言などの取組を実施することで、進んで読書に親しむ姿が見られるようになった。そして、基礎的な言語能力の習得に努めている。学習中にわからない言葉があったときには、その都度辞書を引いて言葉の意味や使い方を全体で確認している。また、毎時間漢字の小テストを実施し、新出漢字の定着を図っている。</p> <p>算数に関しては、自分の考えを伝え合う力を育むことを目指している。そのため、グループワークや全体共有の場では、答えだけでなくどのように考えたのかを説明するように指導している。学力格差への対策として、ドリルや単元テストの返却時には、個別に解説し、学力が定着するよう指導している。また、ギガタブを活用し、視覚的な理解を促した授業作りを心掛けている。</p>
千城台わかば	<p>本校では、学力向上アクションプランに基づいて、国語と算数に重点をおいた活動に取り組んできた。具体的には、①朝学習での復習（ドリルやプリント、ギガタブなど）②定期的な漢字（言葉）・計算テスト③読書活動の励行④家庭学習の推進などに取り組んだことで、学力向上につながったと考えられる。いずれも、既習内容の強化・補充や、学習習慣の定着が図られ、児童が見通しをもって主体的に活動に取り組もうとする姿につながり、学力向上にもよい影響が出たと考えられる。児童や家庭の実態、個々の能力などによって、定着具合や取り組み方に差があるため、今後は、現在の活動を継続しつつ、個に応じた取り組み方についても検討していきたい。</p>

イ 中学校

学校名	取組内容
加曽利	<p>昨年度より、帰りの会後の10分間に職員作成の課題を用いて、国語、数学、英語のドリル学習に取り組んでいる。放課後の時間確保のため実施できないこともあるが、継続して取り組むことで生徒の習慣となった。今年度より、ドリルパークを活用して、理科、社会を加えた5教科に拡大している。ドリルパークにより個々の能力に応じた補充学習となり、学力の底上げにつながった。また、月末と定期テストの返却日に学習支援として、放課後に30分の学習相談の時間を設けた。これにより、学習に向き合う機会が増えた。</p>

新宿	<p>本校では数学と英語の2教科について隔週で週1回放課後に補習を行っている。対象は教員から声をかけた生徒と希望する生徒である。補習の目的は学力の底上げとしており、基本的な内容を15分程度で行うようにしている。また、定期テスト前には学習相談の時間を設け、教員に質問することはもちろん生徒同士で教え合うことも行っている。これらの活動を通して、基礎を固め、授業に参加できる生徒を増やす（授業に取り残される生徒を減少させる）ことで、生徒の毎日の授業に対する主体性が高まり、学習効果があったのではないかと考える。また、ほとんどの教科では授業の中に振り返りを取り入れており、生徒自身が「何を学習したのか」「何がまだわからない（できない）のか」を確認することで自己の課題に気付きやすい環境ができています。</p>
こてはし台	<ul style="list-style-type: none"> ・繰り返しの練習を継続的に行う。 ・定期テスト前や夏休みに学習相談を実施する。 ・各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を意識して、日々の授業を深めるような教材開発を進める。 ・ICT機器を活用し、生徒間の意見がより深まるような授業展開を行った。
幸町二	<p>本校の実態として、地域や保護者は協力的であり、学校に対する期待も大きいものがある。職員は学校生活において安全・安心できる学校づくりや、生徒会を中心として落ち着いた学校生活を行えるよう、委員会活動が活発である。普段の授業においては「計画的に」「丁寧に」を意識し、無理のない定期テスト範囲や課題を定め、生徒への負担が時期によって偏りがないように努めている。また、躓きやすい内容については丁寧に時間をかけて指導している。授業時数については様々な原因で年間計画通りには進まないことから、3か月ごとに授業時数の見直しを教務主任が行い、適宜調整している。結果として授業変更が多いが、生徒たちは落ち着いて授業に臨み、必要な授業が適切に実施できることが結果につながっていると考えられる。</p>
泉谷	<p>当該学年においては、コロナ禍の休校中の課題にも十分に取り組みせず、入学後も基礎・基本の定着に課題があった。そこで、基礎・基本の定着に向けて、教員が自作のドリルを作成して、国語では漢字問題、数学では計算問題などの反復練習に継続して取り組んだ。</p>
土気南	<p>千葉県学力状況調査や全国学力・学習状況調査の結果について全校で共有し、自校の課題を明確にした。本校は令和4年度調査において「記述問題」に対して課題があることが判明した。それを受けて、日頃の取組の中で記述活動を増やし、「書く」活動を習慣化していった。定期テストにおいても記述問題の比率を増やすことで、生徒の意識を変えていくことにもつながった。また、ペアワーク等を取り入れ教え合い活動を行うことで、思考力・判断力・表現力の育成につながった。</p>
大椎	<p>国語、数学ともに思考力・判断力・表現力に関する領域で向上が見られた。特に国語「C読むこと」、数学「A数と式」「B図形」についてである。</p> <p>【国語】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新聞記事を用いて記事の内容に関する問いについて、自分の考えを記述する練習を重ねてきた。 ・問いの内容を正しく判断し、それに合わせた解答をしなければならないことを指導してきた。 ・自分の考えをアウトプットするということは、読み手（聞き手）が存在するのだから、その読み手を意識して表現するよう指導してきた。 <p>【数学】</p> <p>対話的で協働的な学びを実践し、特に自分の考えを書き、説明する授業を行ってきた。具体的な例は以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①説明文の穴埋めをする。 ②自ら説明を考え、伝える課題に取り組む。 ③複数解答がある課題を提示し、お互いの解答を説明し合う。 <p>説明の骨組みをまず理解し、その骨組みを基に対話的で協働的な学びを実践した授業を行ってきた成果と考えられる。</p>

3 質問紙調査結果概要

【資料5】児童生徒質問紙調査より [千葉市・全国] <令和5年度>

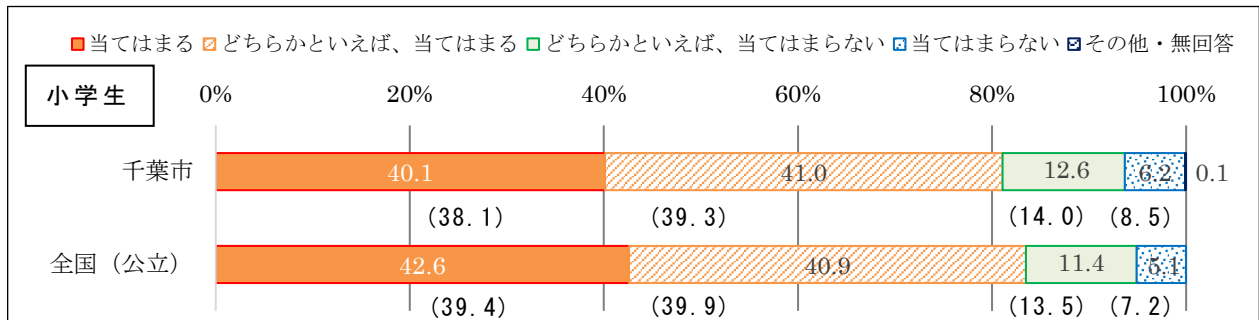
※質問文末の()内の数字は、「児童生徒質問紙調査」の質問番号を示している。

※帯グラフの()の数字は、令和4年度同質問の回答の割合を示している。

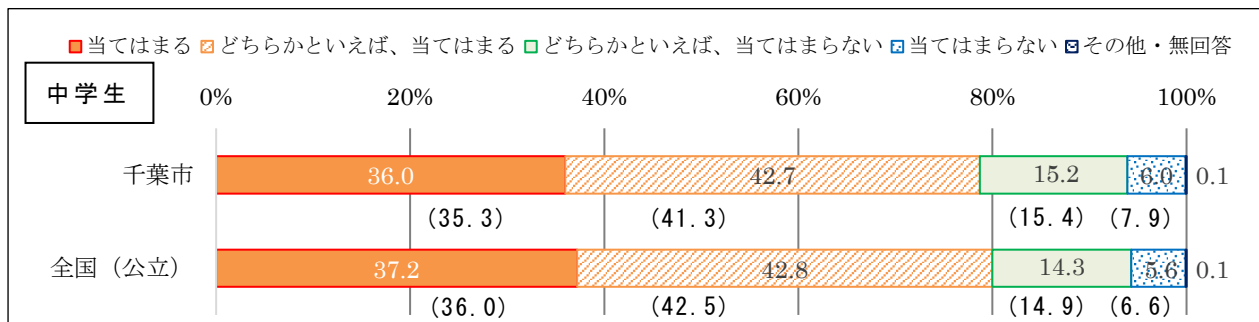
※小数第2位以下を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合がある。

〔自己肯定感、将来の夢や目標等に関する意識〕

1 自分には、よいところがあると思いますか。(小4)(中4)

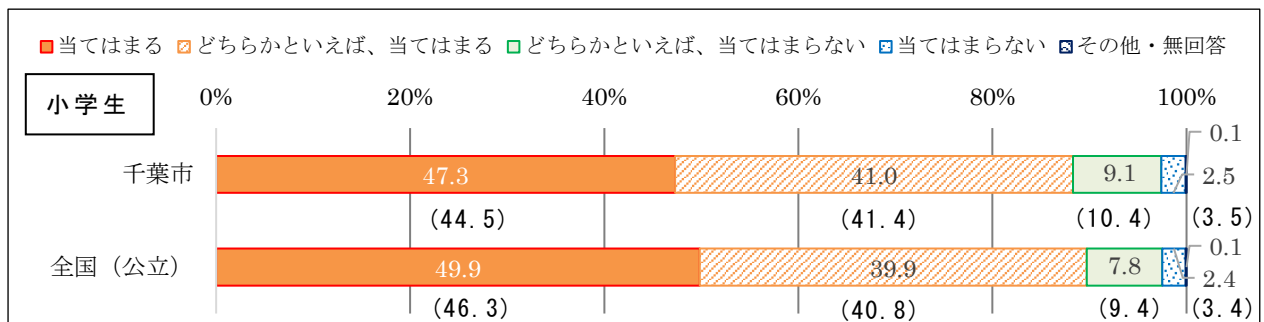


・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→81.1% (全国より2.4ポイント低い)

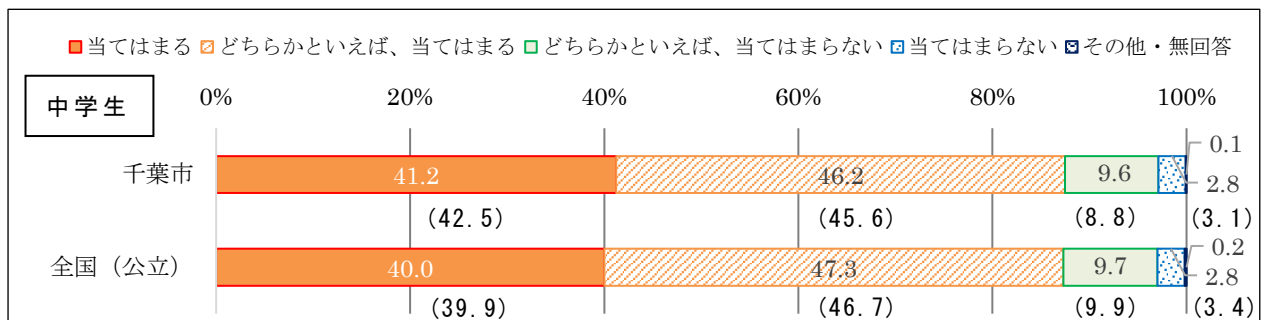


・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→78.7% (全国より1.3ポイント低い)

2 先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか。(小5)(中5)

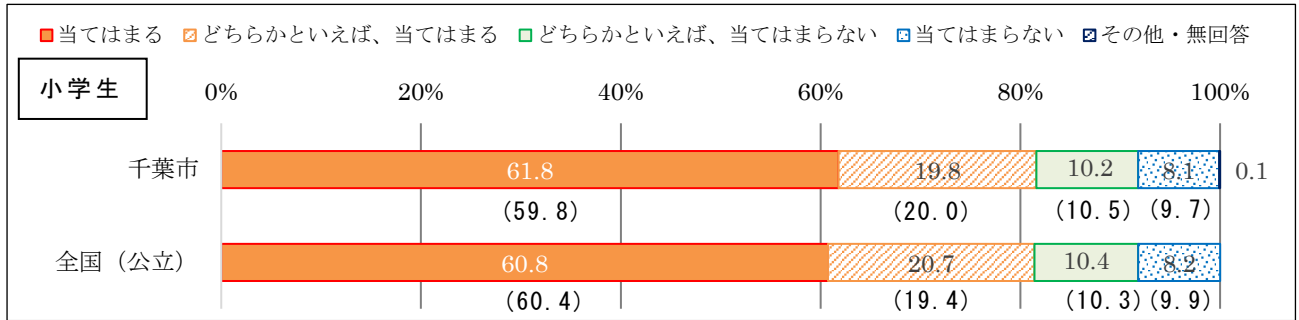


・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→88.3% (全国より1.5ポイント低い)

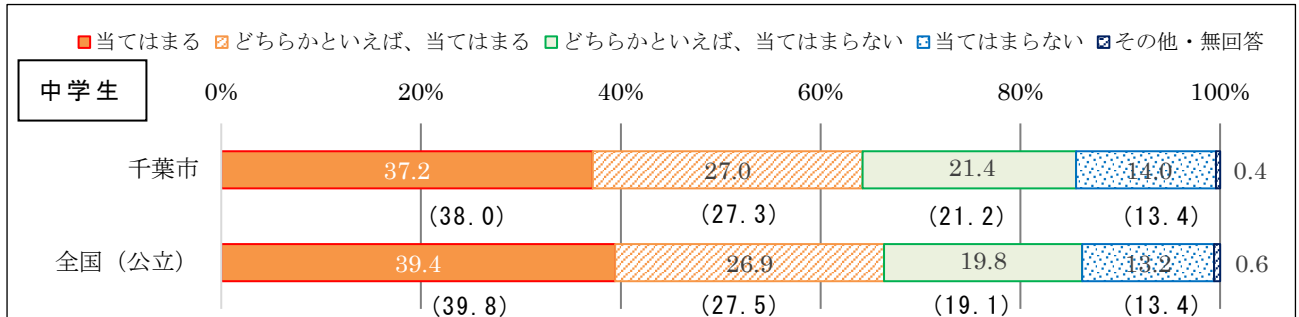


・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→87.4% (全国より0.1ポイント高い)

3 将来の夢や目標を持っていますか。(小7)(中7)

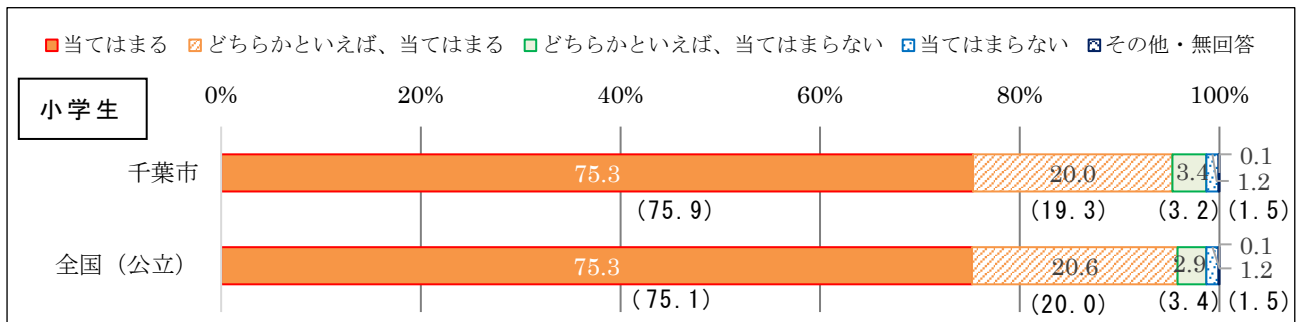


・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→81.6% (全国より0.1ポイント高い)

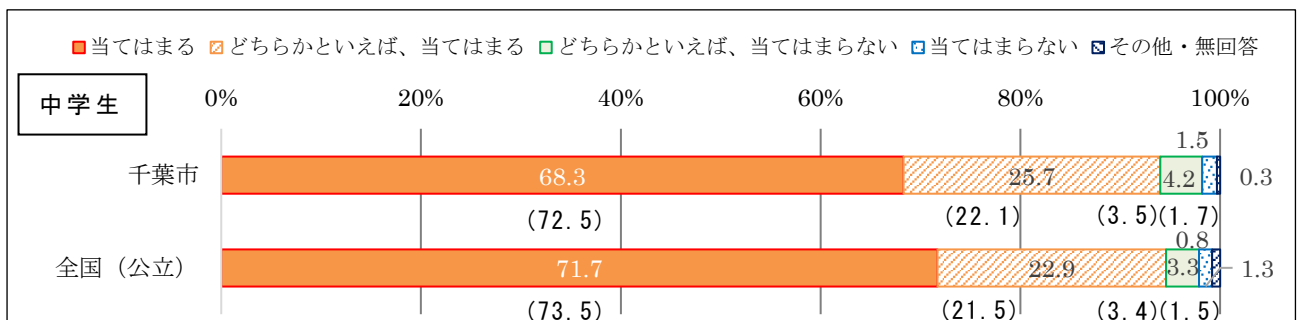


・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→64.2% (全国より2.1ポイント低い)

4 人の役に立つ人間になりたいと思いますか。(小11)(中11)



・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→95.3% (全国より0.6ポイント低い)

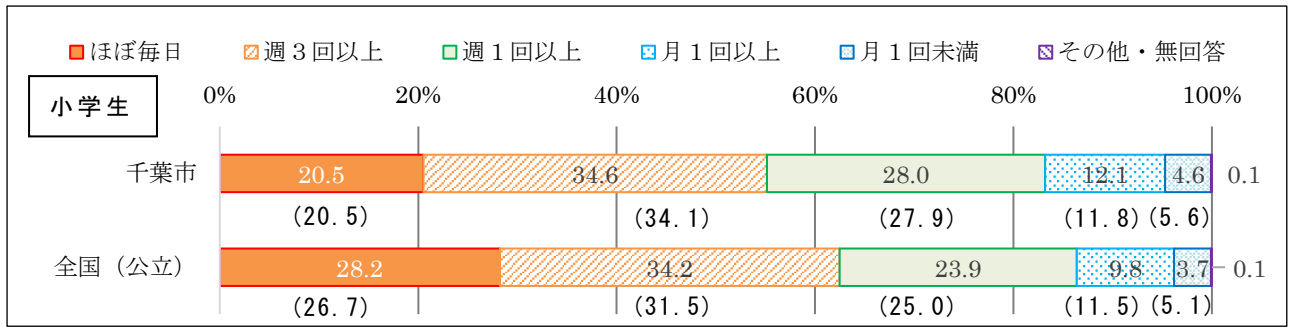


・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→94.0% (全国より0.6ポイント低い)

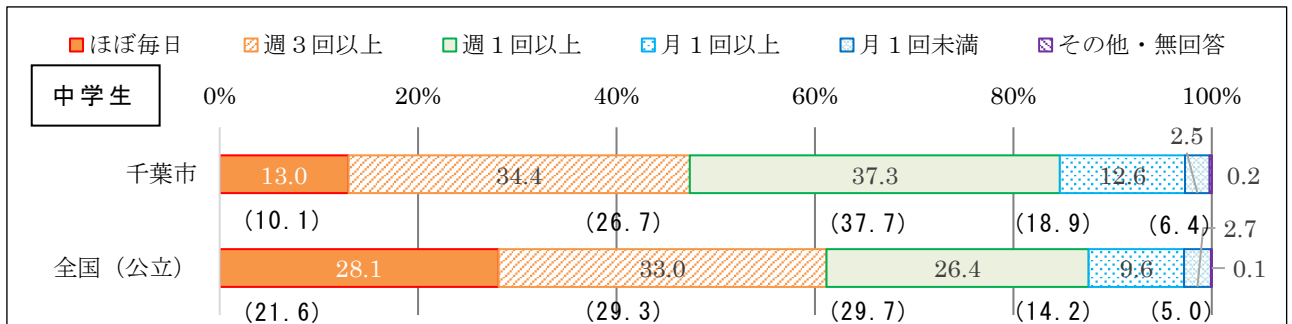
設問1「自分には、よいところがあると思いますか」の肯定的な回答の割合は、平成25年度以降増加傾向が見られていた中で、今年度も増加傾向が続いている。また、小学生の方が中学生より高い傾向にある。しかし、全国に比べて小学生・中学生ともに肯定的な回答の割合が低く、引き続き、児童生徒の自己肯定感を高める支援をしていく必要がある。設問3「将来の夢や目標を持つこと」については、肯定的な回答が小学生において8割である。設問4「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」については、肯定的な回答が小学生・中学生ともに9割を超えている。これらは、キャリア教育推進の成果と考えられる。

〔ICT機器の活用に関する意識〕

5 5年生まで(1、2年生のとき)に受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか。(小29)(中33)

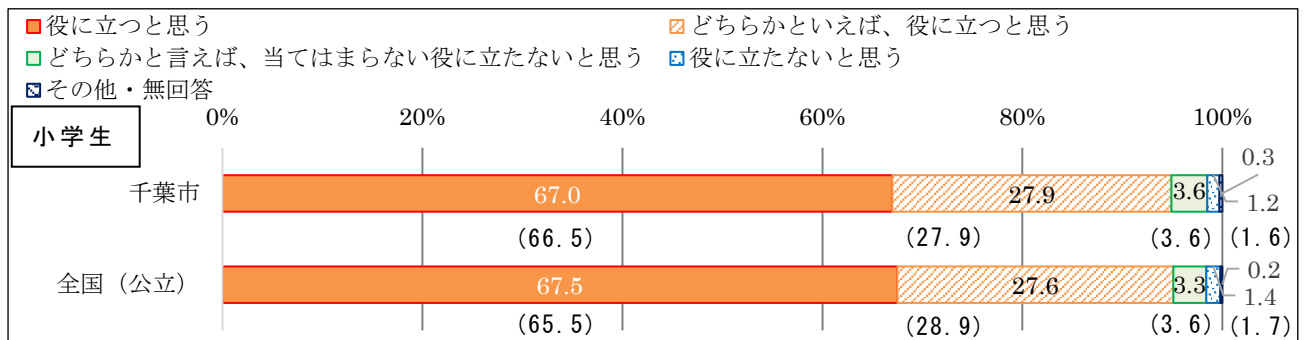


・ほぼ毎日、週3回以上、週1回以上→83.1% (全国より3.2ポイント低い)

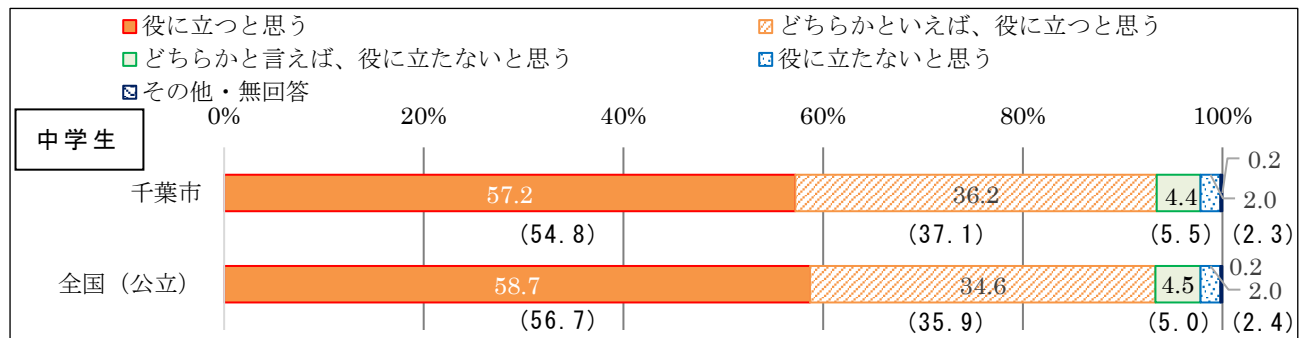


・ほぼ毎日、週3回以上、週1回以上→84.7% (全国より2.8ポイント低い)

6 学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思いますか。(小30)(中34)



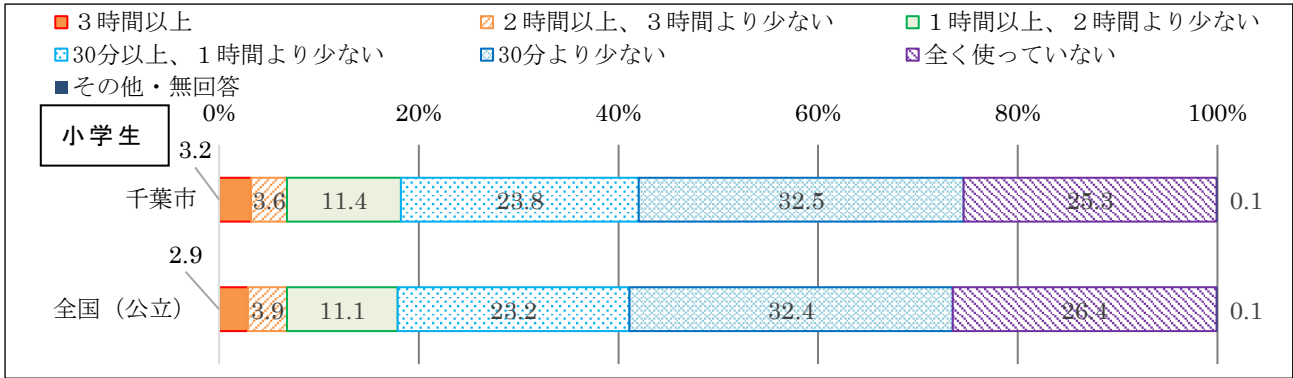
・役に立つと思う、どちらかといえば役に立つと思う→94.9% (全国より0.2ポイント低い)



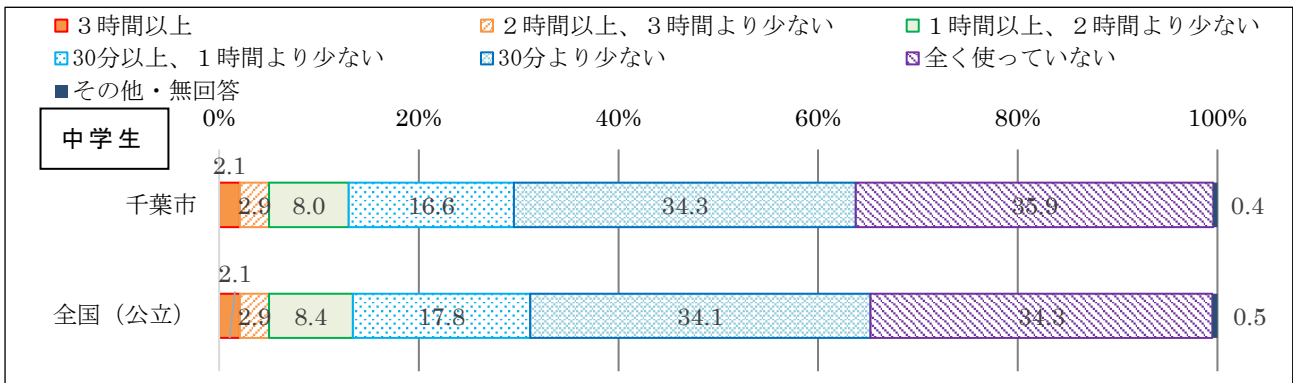
・役に立つと思う、どちらかといえば役に立つと思う→93.4% (全国より0.1ポイント高い)

7 学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、PC・タブレットなどのICT機器を、勉強のために使っていますか（遊びなどの目的に使う時間は除く）。（小31）（中35）

※令和4年度に同質問は無いため、（ ）の記載なし



- ・ 3時間以上、2時間以上3時間より少ない⇒6.8%（全国と同割合）
- ・ 1時間以上2時間より少ない、30分以上1時間より少ない⇒35.2%（全国より0.9ポイント高い）
- ・ 30分より少ない、全く使っていない⇒57.8%（全国より1.0ポイント低い）

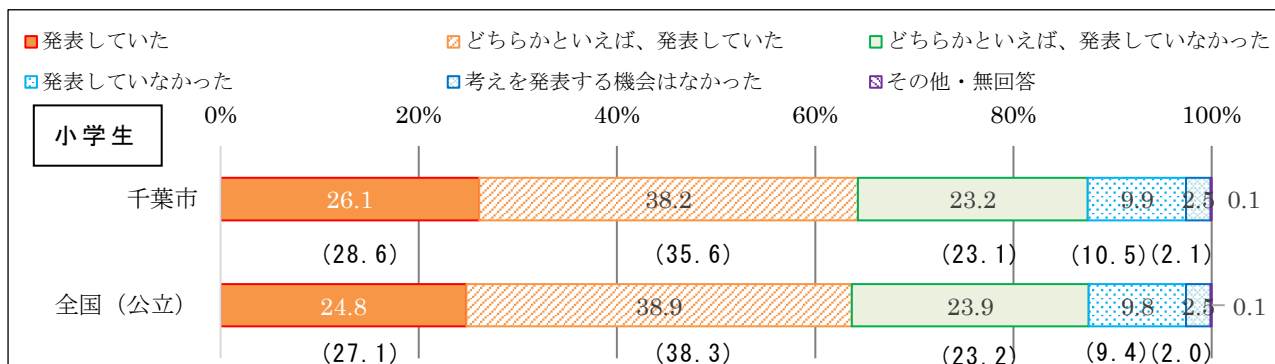


- ・ 3時間以上、2時間以上3時間より少ない⇒5.0%（全国と同割合）
- ・ 1時間以上2時間より少ない、30分以上1時間より少ない⇒24.6%（全国より1.6ポイント低い）
- ・ 30分より少ない、全く使っていない⇒70.2%（全国より1.8ポイント高い）

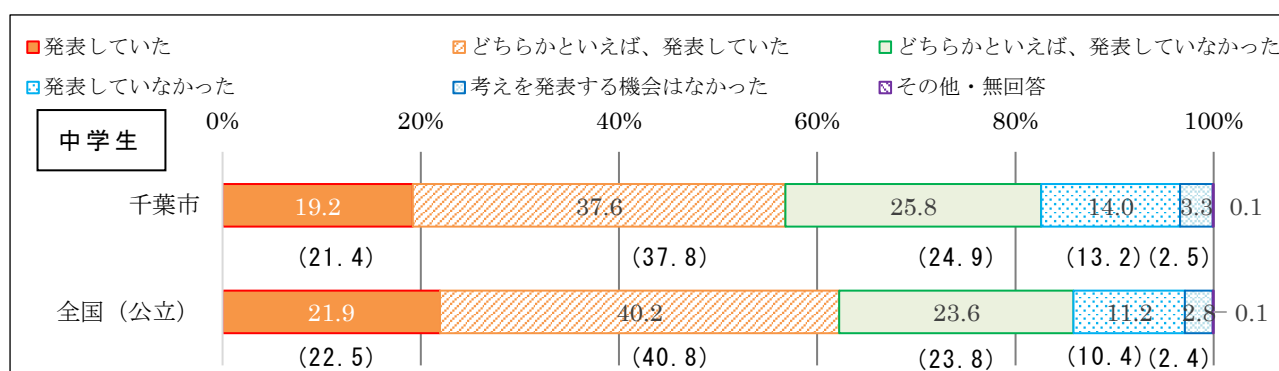
一昨年度より、GIGAスクール構想の基、1人1台タブレットPCと高速ネットワークが整備されたことにより、ICT機器の活用に関する質問の回答傾向が変化した。設問5「PC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用してきたか」の質問については、一昨年度は週1回以上の使用が小学生31.2%、中学生が23.4%であったのに対し、昨年度小学生は82.5%、中学生は74.5%と大幅に上昇し、今年度も小学生83.1%、中学84.7%と上昇が続いている。設問6「学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思うか」については、「役に立つと思う」「どちらかといえば、役に立つと思う」という肯定的回答が、小学生では94.9%、中学生では93.4%と高く、児童生徒が学習においてICT機器を効果的に活用しているという意識を持っている。このICT活用に対する肯定的な意識を大切にして、学校の授業においてICT活用を一層推進していく。設問7「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、PC・タブレットなどのICT機器を、勉強のために使っているか」については、「30分より少ない」「全く使っていない」の回答が小学生では57.8%、中学生では70.2%と高い。今後、家庭と連携しながら、ICT機器も効果的に活用し、家庭学習の充実につなげていく必要がある。

〔主体的・対話的で深い学び（個別最適な学びと協働的な学び）に関する意識〕

- 8 5年生まで（1、2年生のとき）に受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか。（小32）（中36）

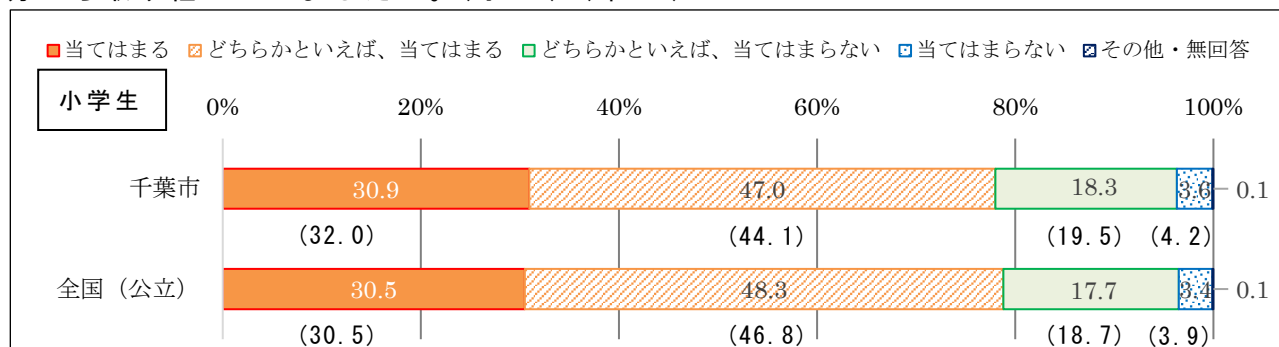


・発表していた、どちらかといえば発表していた→64.3%（全国より0.6ポイント高い）

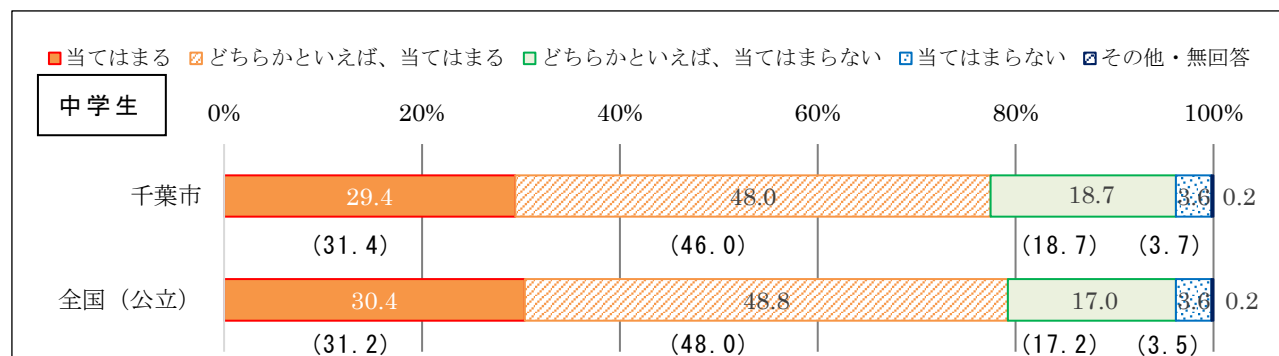


・発表していた、どちらかといえば発表していた→56.8%（全国より5.3ポイント低い）

- 9 5年生まで（1、2年生のとき）に受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか。（小33）（中37）

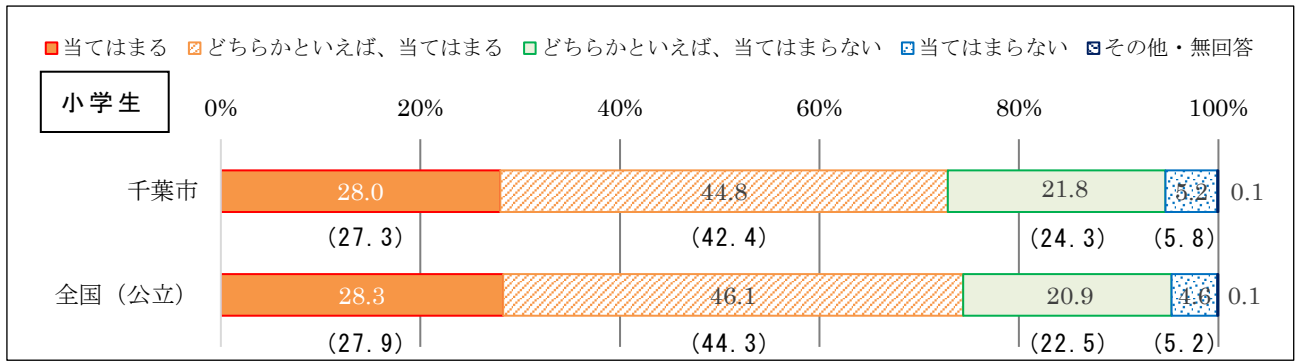


・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→77.9%（全国より0.9ポイント低い）

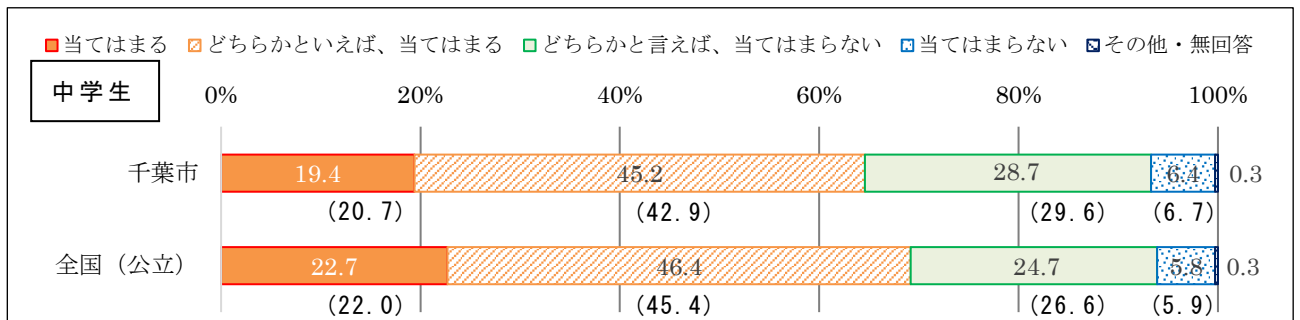


・当てはまる、どちらかというとき当てはまる→77.4%（全国より1.8ポイント低い）

10 5年生までに(1、2年生のときに)受けた授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか。(小34)(中38)

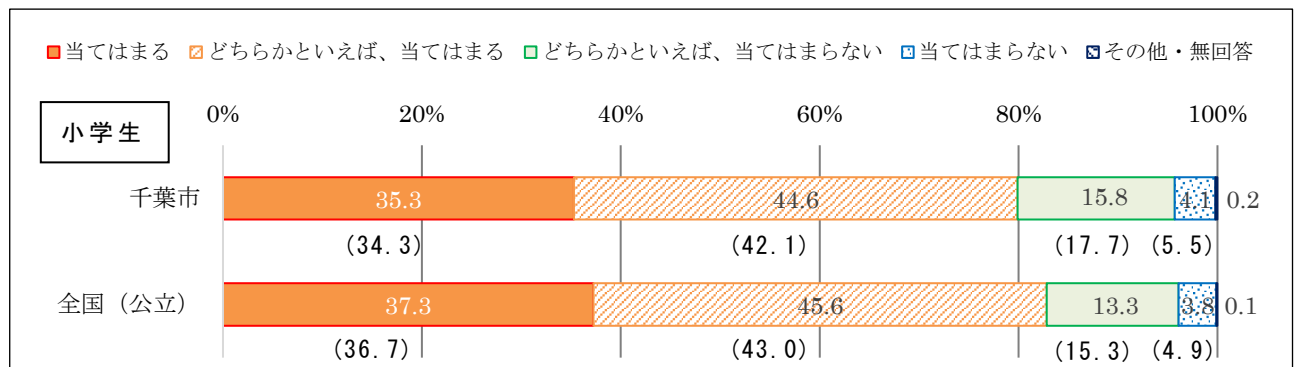


・当てはまる、どちらかというとき当てはまる→72.8% (全国より1.6ポイント低い)

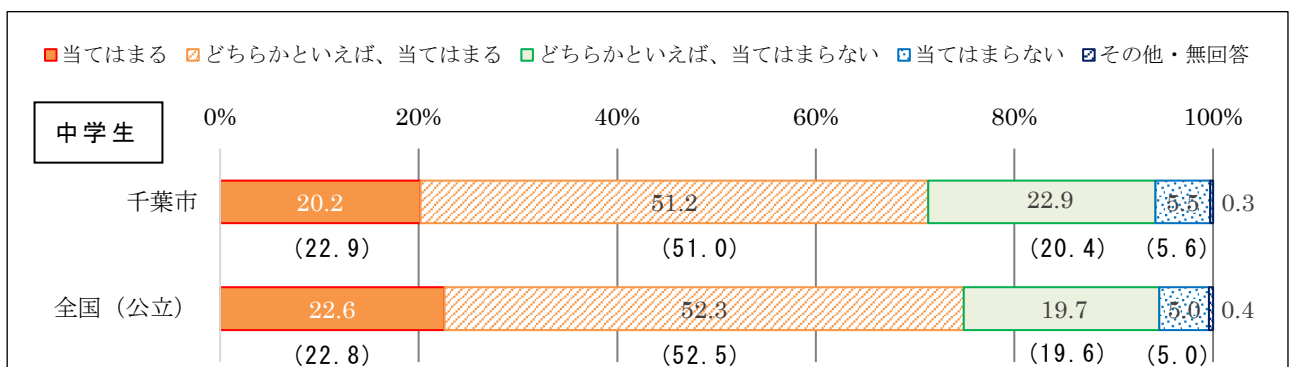


・当てはまる、どちらかというとき当てはまる→64.6% (全国より4.5ポイント低い)

11 5年生までに(1、2年生のときに)受けた授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていましたか。(小35)(中39)

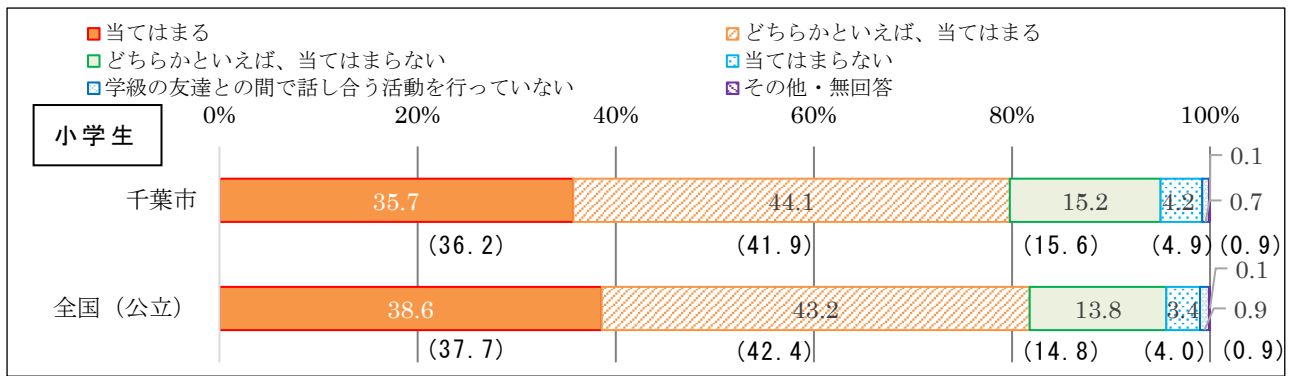


・当てはまる、どちらかというとき当てはまる→79.9% (全国より3.0ポイント低い)

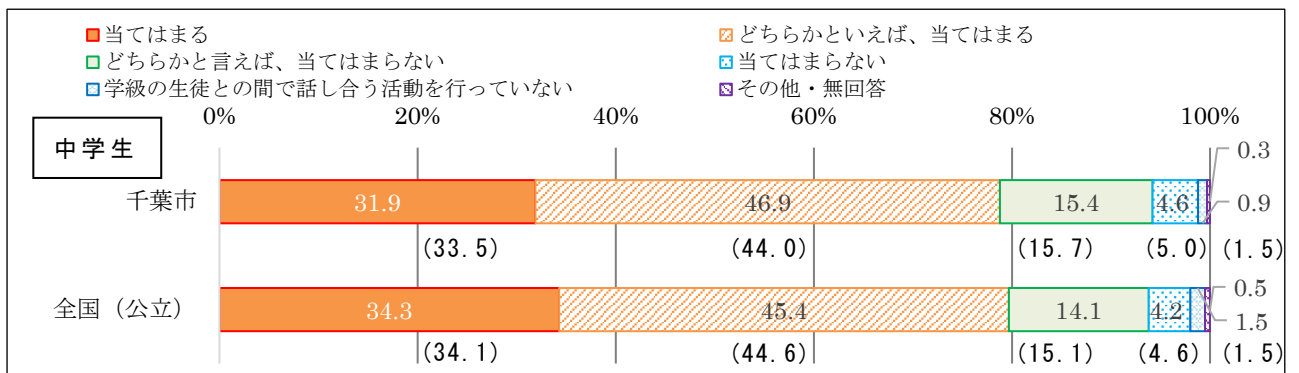


・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→71.4% (全国より3.5ポイント低い)

12 学級の友達（生徒）との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたり
 することができますか。（小 36）（中 40）

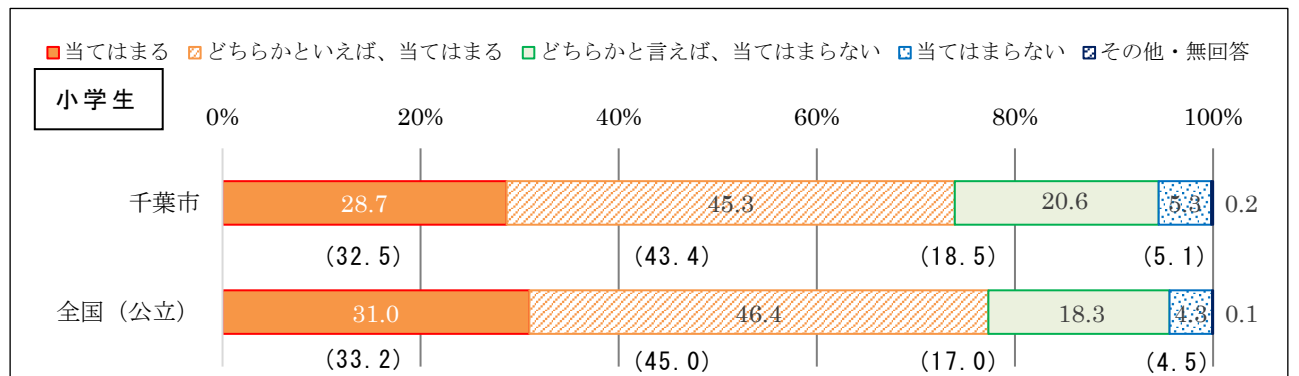


・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→79.8%（全国より2.0ポイント低い）

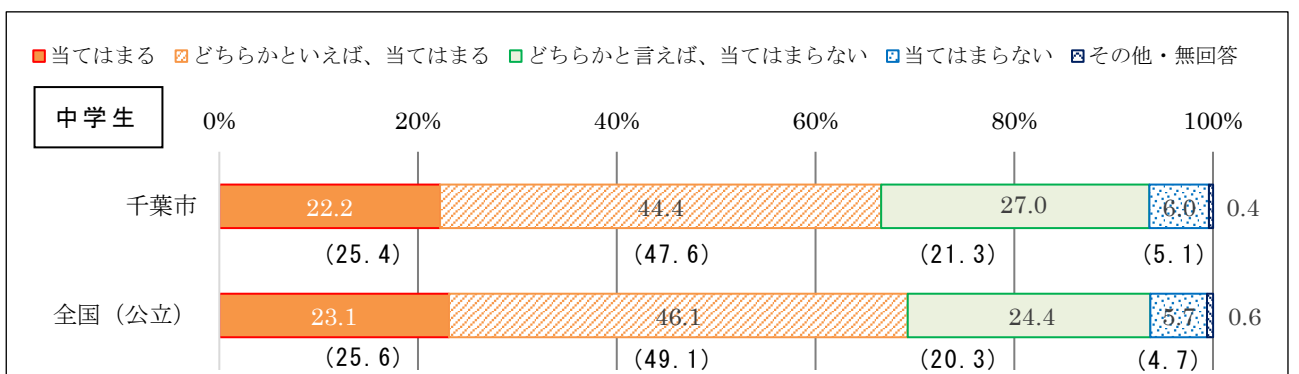


・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→78.8%（全国より0.9ポイント低い）

13 学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につ
 ながることができるか。（小 37）（中 41）



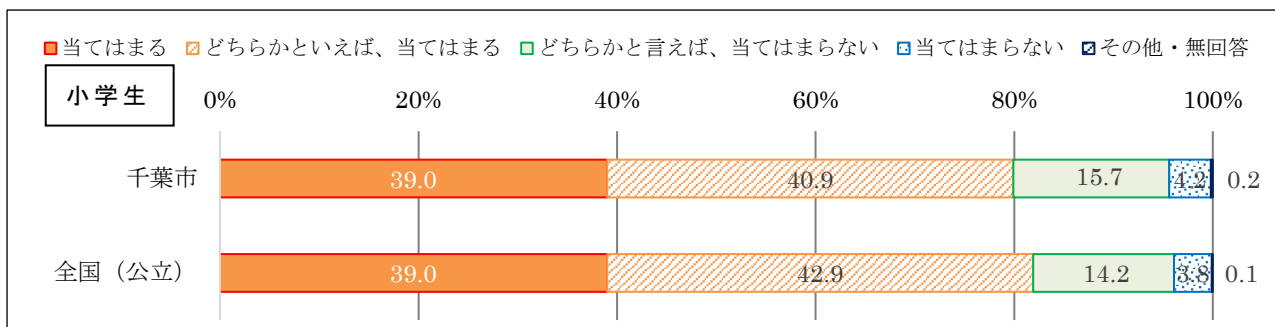
・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→74.0%（全国より3.4ポイント低い）



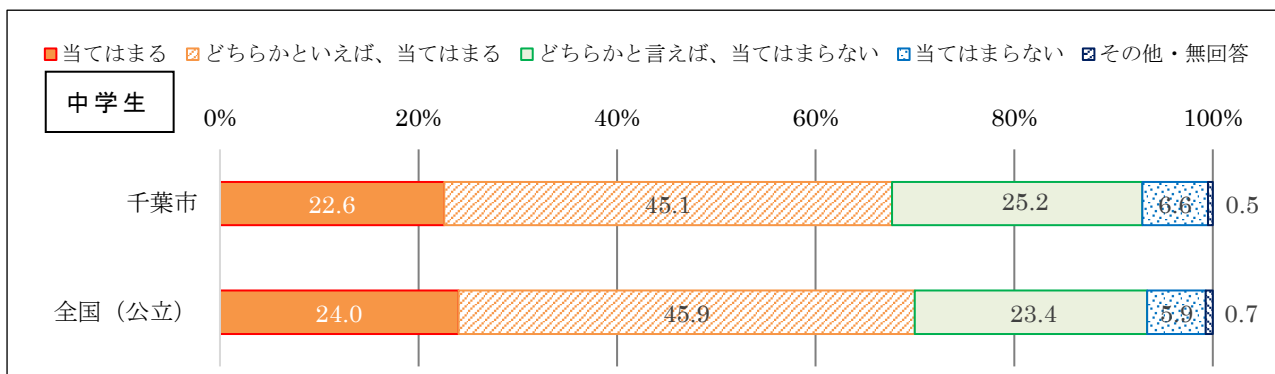
・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→66.6%（全国より2.6ポイント低い）

14 授業で学んだことを、ほかの学習で生かしていますか。(小 38)(中 42)

※令和4年度に同質問は無いため、() の記載なし



・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→79.9% (全国より 2.0 ポイント低い)

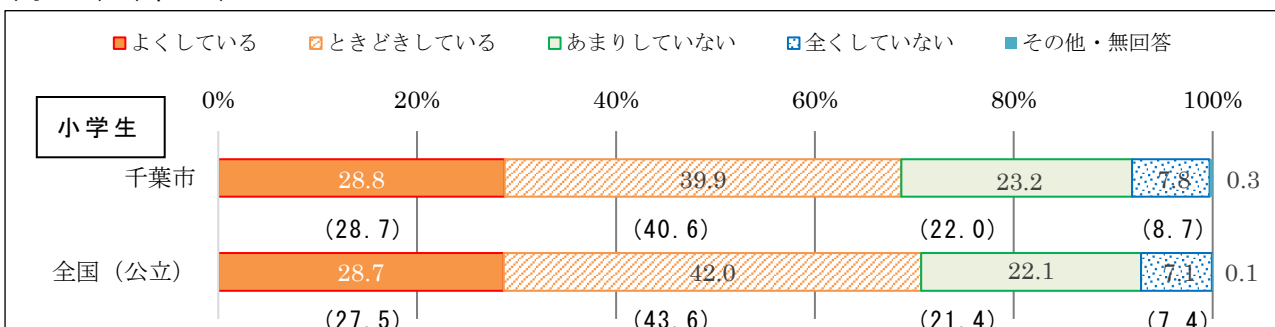


・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→67.7% (全国より 2.2 ポイント低い)

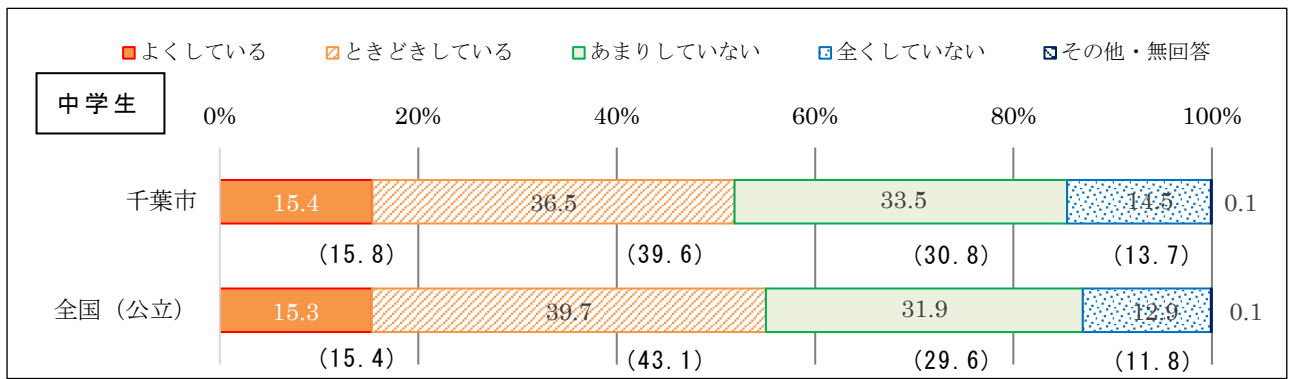
設問 8 の小学生を除いて、主体的・対話的で深い学びに関する全ての設問で、肯定的回答が全国平均を下回っている。設問 9 「5 年生まで(1、2 年生のとき)に受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたか」の肯定的回答は、小学生が 77.9% で全国より 0.9 ポイント低く、中学生は 77.4% で全国より 1.8 ポイント低い。また、設問 12 「学級の友達(生徒)との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができているか。」の肯定的回答は、小学生が 79.8% であり全国より 2.0% 低く、中学生は 78.8% と 0.9 ポイント低い結果となった。今後も主体的・対話的で深い学びを目指した授業改善を進めていく必要がある。設問 11 「5 年生までに(1、2 年生のとき)に受けた授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていましたか」の肯定的回答は、小学生が 79.9% で全国より 3.0 ポイント低く、中学生が 71.4 ポイントで全国より 3.5 ポイント低い結果となった。また、設問 13 「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」の肯定的回答は、小学生が 74.0% で全国より 3.4 ポイント低く、中学生が 66.6% と全国より 2.6 ポイント低い結果であった。児童生徒一人一人の学びに合わせた支援、自己調整を促すような支援を行い、個別最適な学びの充実を図っていく必要がある。

〔家庭での学習に関する意識〕

15 家で自分で計画を立てて勉強をしていますか(学校の授業の予習や復習を含む)
(小 16)(中 16)

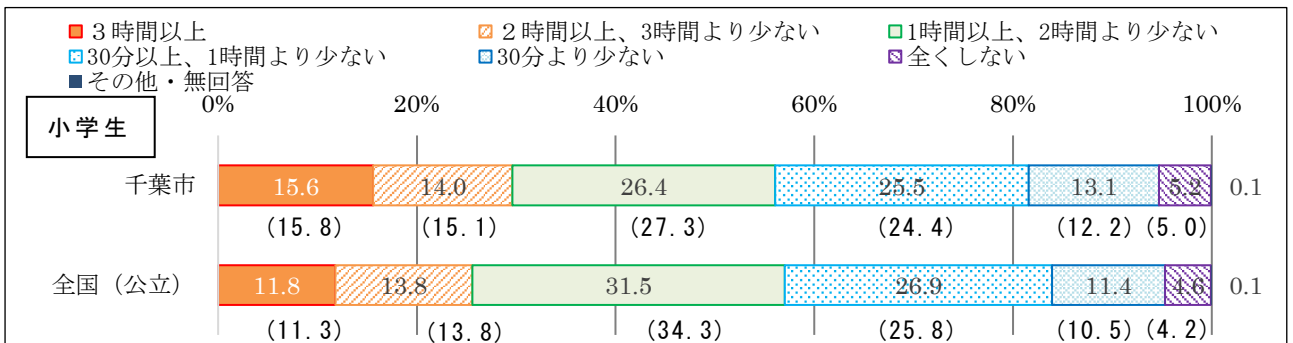


・よくしている、ときどきしている→68.7% (全国より 2.0 ポイント低い)



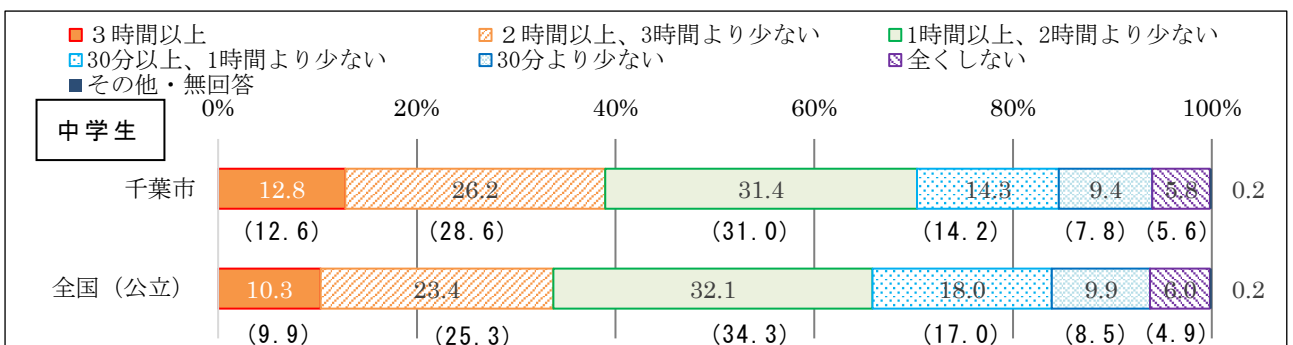
・よくしている、ときどきしている→51.9% (全国より3.1ポイント低い)

16 学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか。（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）（小17）（中17）



・1日2時間以上勉強をしている→29.6% (全国より4.0ポイント高い)

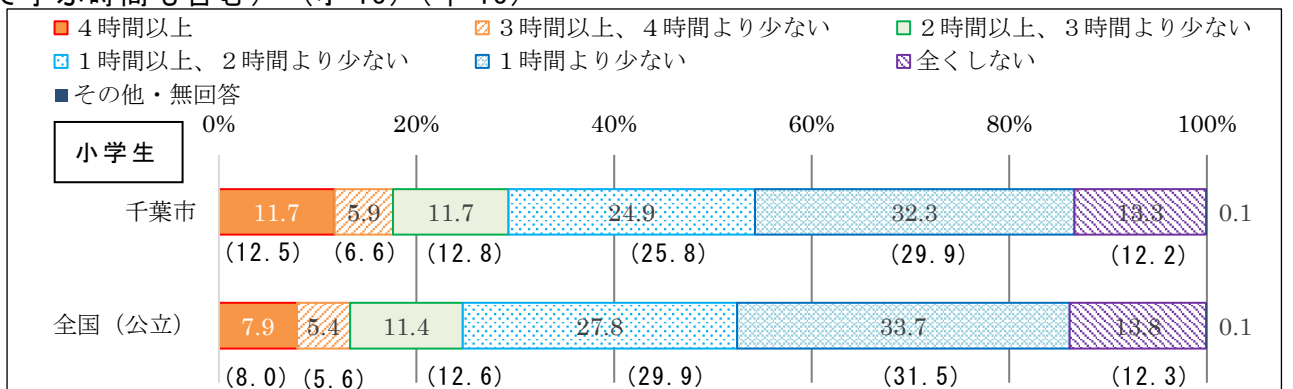
・30分より少ない、全くしない→18.3% (全国より2.3ポイント高い)



・1日2時間以上勉強をしている→39.0% (全国より5.3ポイント高い)

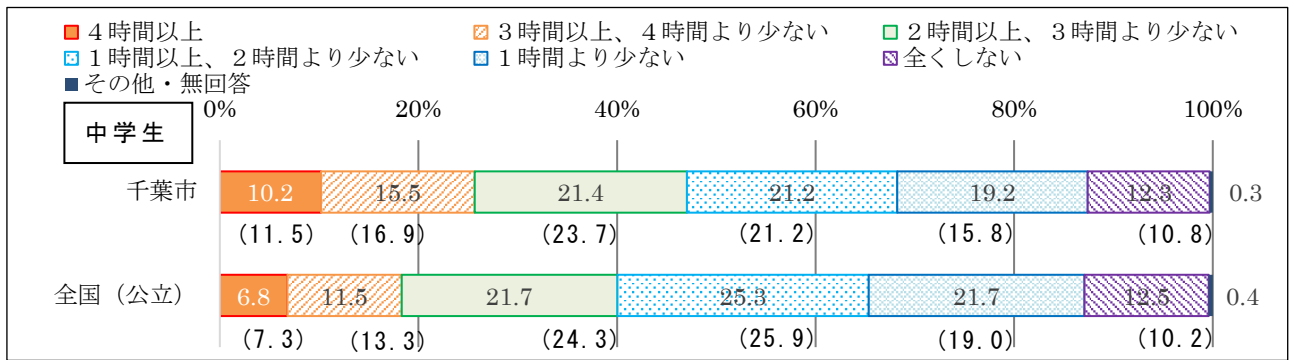
・30分より少ない、全くしない→15.2% (全国より0.7ポイント低い)

17 土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか。（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）（小18）（中18）



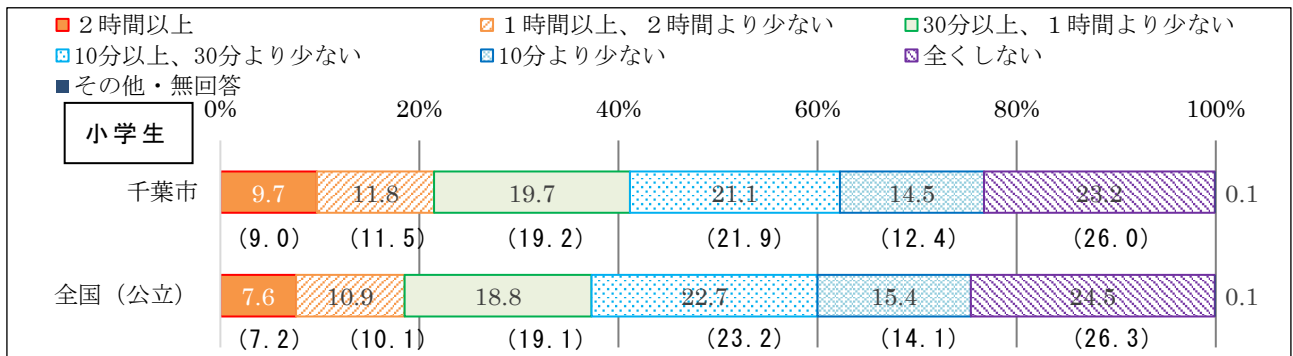
・1日2時間以上勉強をしている→29.3% (全国より4.6ポイント高い)

・全くしない→13.3% (全国より0.5ポイント低い)

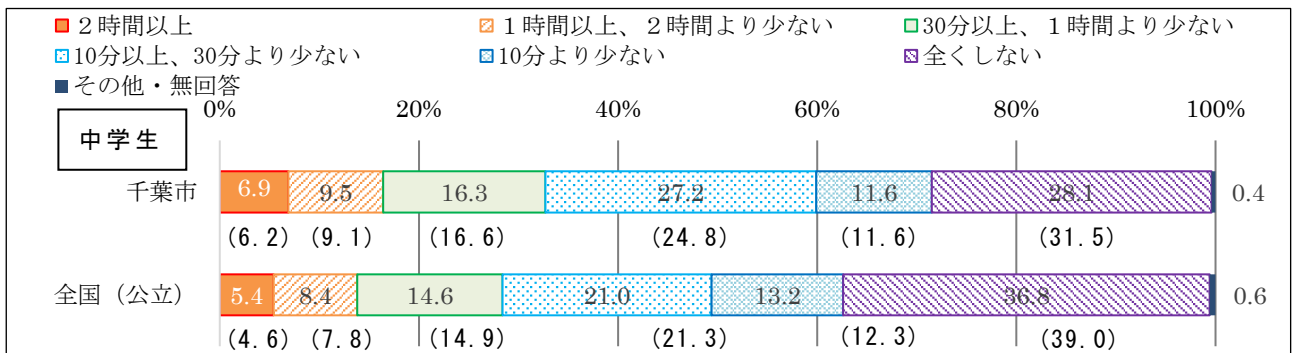


- ・ 1日2時間以上勉強をしている→47.1%（全国より7.1ポイント高い）
- ・ 全くしない→12.3%（全国より0.2ポイント低い）

18 学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、読書を行いますか（電子書籍の読書も含む。教科書や参考書、漫画や雑誌は除く。）（小20）（中20）



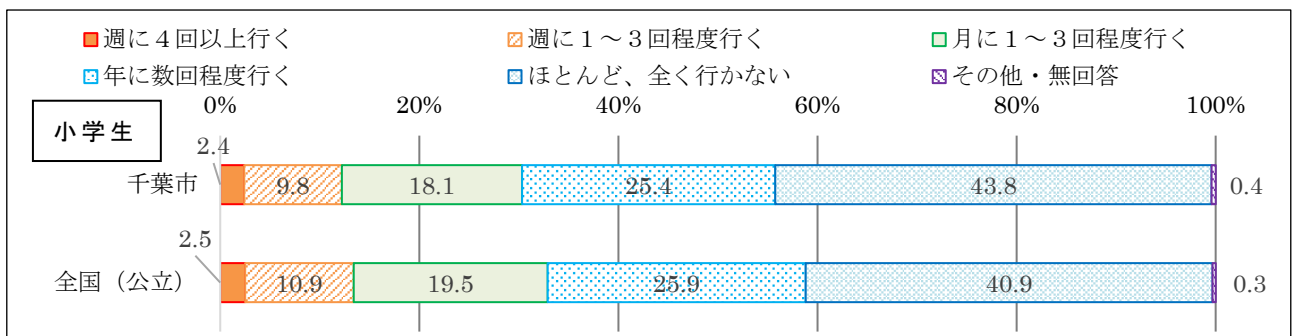
- ・ 1日1時間以上読書をしている→21.5%（全国より3.0ポイント高い）
- ・ 全くしない→23.2%（全国より1.3ポイント低い）



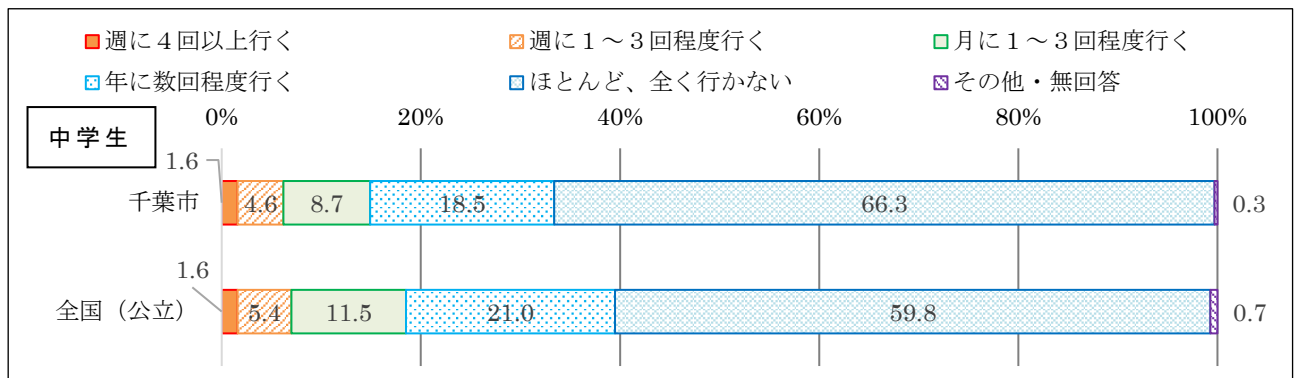
- ・ 1日1時間以上読書をしている→16.4%（全国より2.6ポイント高い）
- ・ 全くしない→28.1%（全国より8.7ポイント低い）

19 昼休みや放課後、学校が休みの日に、本（教科書や参考書、漫画や雑誌は除く）を読んだり、借りたりするために、学校図書館・学校図書室や地域の図書館（それぞれ電子図書館を含む）にどれくらい行きますか。（小21）（中21）

※令和4年度に同質問は無いため、（ ）の記載なし

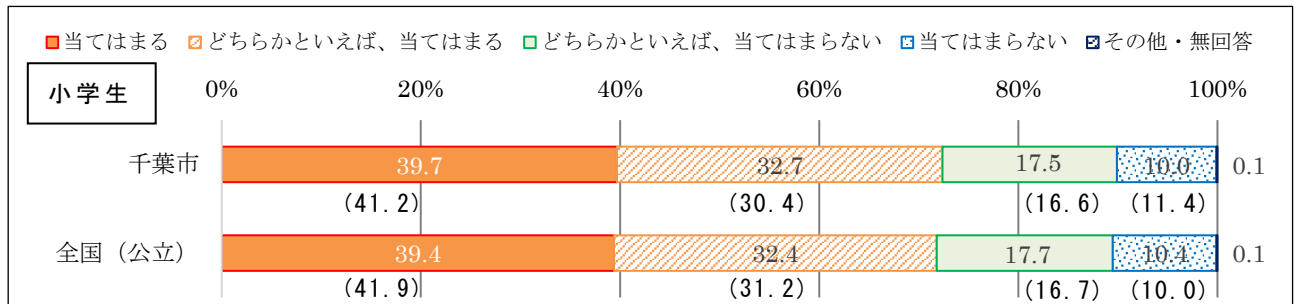


- ・ 週に4回以上、週に1～3回、月に1～3回以上の合算→30.3%（全国より2.6ポイント低い）

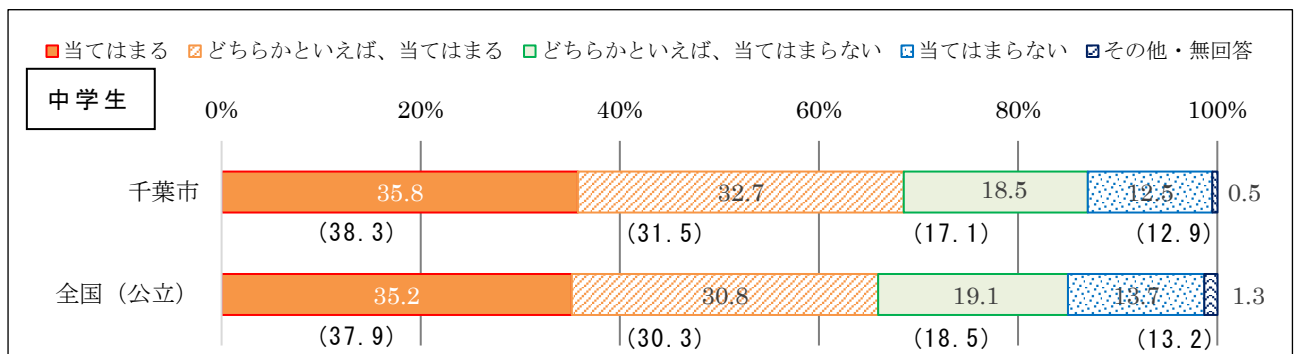


・週に4回以上、週に1~3回、月に1~3回以上の合算→14.9% (全国より3.6ポイント低い)

20 読書は好きですか。(小24)(中24)



・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→72.4% (全国より0.6ポイント高い)



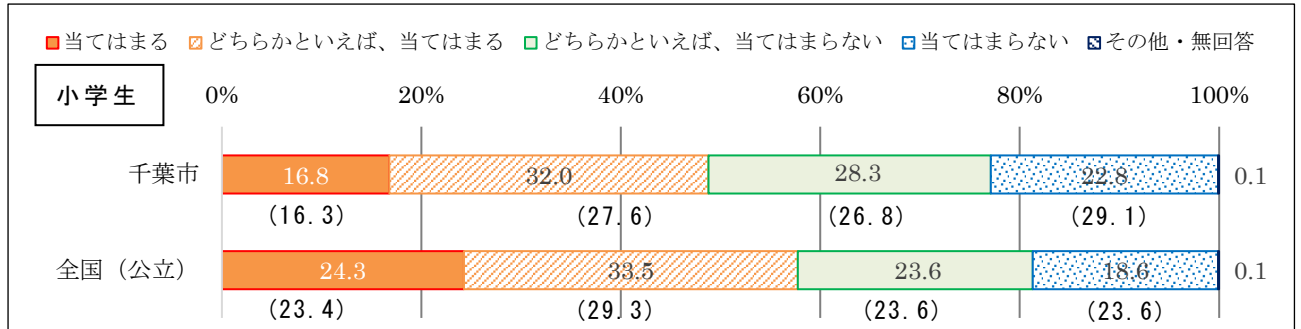
・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→68.5% (全国より2.5ポイント高い)

設問15「家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか」への肯定的な回答率は小学生が68.7%、中学生が51.9%であり、小中学生ともに全国よりも低く、昨年度と比較しても小学生が0.8ポイント、中学生が3.5ポイント低い数値となった。自分から計画を立て学習に取り組むことができるようにするために、日々の授業においても自分で計画を立てる場面を設定するとともに、計画的に学習に取り組めるよう支援していく必要がある。また、設問16より、普段1日2時間以上学習している児童生徒の割合は、小・中学生ともに全国平均よりも高く、学習習慣がきちんと身に付いている児童生徒がいることがわかる。また、「全くしない」と回答している中学生の割合が全国平均よりも低くなり、進んで学習しようとする意識の高まりが見られる。「30分より少ない」や「全くしない」という小学生が18.3%で中学生が15.2%であり、引き続き家庭学習を習慣化できるよう家庭と連携していく必要がある。

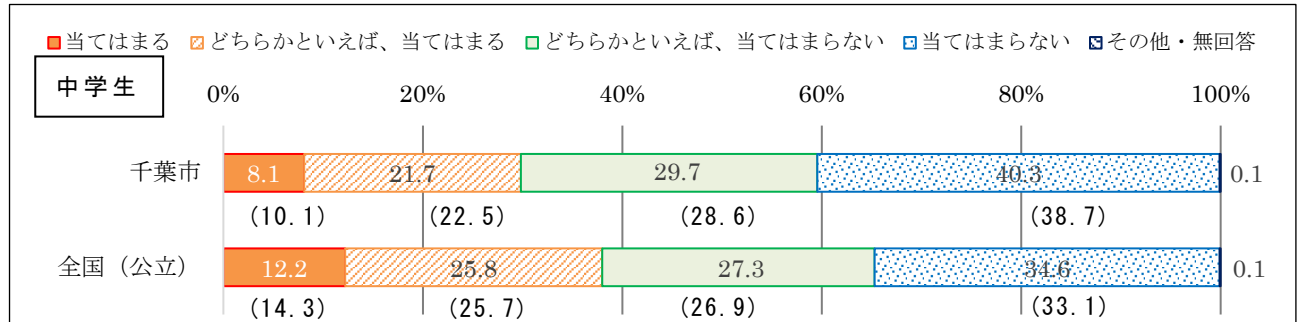
設問18では、1時間以上読書をしている割合は小学生が21.5%、中学生が16.4%と全国よりも高くなっている一方で、「全くしない」と回答した割合は小学生が23.2%、中学生は28.1%であり、昨年度と比較すると、小学生は2.8ポイント、中学生は1.8ポイント減少し、改善傾向にある。設問19より図書館の利用について、全国に比べて、小中学生ともに利用頻度が低い結果となった。調べ学習等による学校図書室及び図書館の利用促進も含め、継続して読書に親しむことを推進していく必要がある。

〔地域・社会との関わりに関する意識〕

21 今住んでいる地域の行事に参加していますか。(小 25) (中 29)



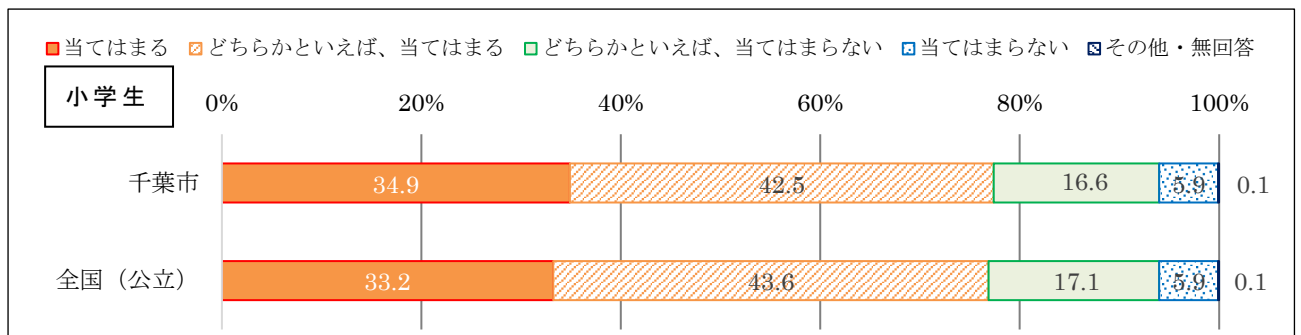
・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→48.8% (全国より 9.0 ポイント低い)



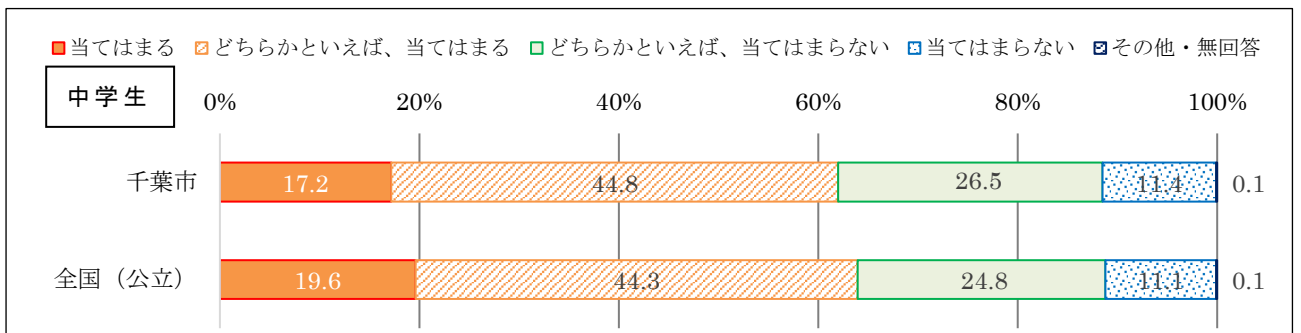
・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→29.8% (全国より 8.2 ポイント低い)

22 地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか。(小 26) (中 30)

※令和4年度に同質問は無いため、() の記載なし



・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→77.4% (全国より 0.6 ポイント高い)



・当てはまる、どちらかといえば当てはまる→62.0% (全国より 1.9 ポイント低い)

設問 21「今住んでいる地域の行事に参加していますか」についての肯定的な回答は、小学生で 48.8%、中学生で 29.8%、設問 22「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」についての肯定的な回答は、小学生で 77.4%と全国平均より高いが、中学生で 62.0%と全国平均と比べて低くなっている。総合的な学習の時間や生徒会活動等を通じて、地域と連携した教育活動のより一層の充実を図っていくとともに、地域の課題に目を向ける学習など、発達段階に応じて地域への関心を高め、進んで関わろうとする意識を育てる取組を行っていくことが望まれる。

4 今後の取組

- (1) 児童生徒の確かな学力の定着を図るため、授業改善を推進する。そのために以下のような取組を行う。
- 市内全小中学校において、全国及び千葉県学力状況調査の結果等をもとに自校の学力の傾向や課題を把握し、その改善に向けた学力向上アクションプランの見直しを行う。その際、教科の学習の中で1人1台端末をどのように活用していくのか、学校での学習と家庭学習との関連をどのように図っていくのかといった点等についても全教職員で共有し、学力の向上に生かす。
 - 全国学力・学習状況調査の結果から考察する改善点を示した「指導改善に向けたポイント」や「授業改善のすすめ」を各学校に配付して、日々の授業での活用促進を図る。
 - 主体的・対話的で深い学びの実現のために、単元の学習の見通しをもたせて自己調整を促す支援をするなどして、個別最適な学びの充実を図れるようにする。

【例】・単元の学習の導入段階で、これから何について学んでいくのか、どのように学習を進めていくのかといった学習の見通しをもたせる。

- ・話し合いをした後に、参考になった友達の意見を聞いたり、人の意見によって自分の考えがどう変化したのかを問いかけたりする。
- ・学習のふりかえりをする際には、今日の学習で何を学んだか、学んだことをこれからの学習にどのようにいかしていけるかを意識できるようにする。

- 教科指導における、1人1台端末を中心としたICTの効果的な活用の促進を図るとともに、家庭学習での端末の活用を促進するお便りを発行するなどして、家庭学習の充実を図る。
- (2) 「教育だよりちば」やWebサイト等を通して、自分で計画を立てて学習に取り組むことや家庭学習の大切さ、家庭での児童生徒の望ましい生活習慣の在り方、継続して読書に取り組むこと等について、広く保護者に発信する。
- (3) 教育委員会関係各課と連携し、自己肯定感を高めるような指導方法や将来の生き方について考え、夢や目標を持つことができるようなキャリア教育を推進するよう学校に助言する。

【例】・自校のグランドデザインに、児童生徒の実態や発達段階をふまえ、四つの基礎的・汎用的能力を具体的な力として設定する。

- ・キャリアパスポートの活用を図り、定期的にこれまで書いたものを見返す機会をつくり、自己の成長を実感できるようにする。
- ・夢をもつことの大切さや今学んでいることの意義を考えることができるようにするために企業や各種団体、地域、家庭と連携を図り、職業体験学習（職場体験・出前授業）を実施する。